

会 議 記 録				
会 議 の 名 称	決算特別委員会 総務文教分科会			会議場所 全員協議会室
				担当職員 井上
日 時	令和2年9月23日(水曜日)		開 議	午前10時00分
			閉 議	午後 8時10分
出席委員	◎山本 ○松山 三上 浅田 木村 木曾 石野			
執行機関出席者	山内市長公室長、鳥山シティプロモーション担当室長、竹村ふるさと創生課長、 荒美ふるさと創生課婚活・定住支援係長、 田中生涯学習部長、福田市民力推進課長、樋口市民力推進課副課長、 小塩文化国際課長、服部文化国際課文化国際係長、岡田文化国際課主幹 石田総務部長、森川自治防災課長、牧野自治防災課副課長、田中自治防災課副課長			
事務局	山内事務局長、井上事務局次長			
傍聴	<input checked="" type="checkbox"/> 可・ <input type="checkbox"/> 否	市民 1名	報道関係者 1名	議員 5名 (福井、富谷、平本、並河、小川)

## 会 議 の 概 要

10 : 00

### 1 開議

### 2 事務局日程説明

10 : 01

### 3 議案審査 ～事務事業評価～

#### (1) 移住・定住促進経費

(市長公室 入室)

10 : 01～

#### 【市長公室】

市長公室長                   あいさつ  
ふるさと創生課長           説明

10 : 08

#### 《質疑》

<木曾委員>

観光も移住・定住関係の宿泊等も非常に増えたと説明されたが、宿泊者数907人、稼働率33.5%という実績については想定内か。

<ふるさと創生課長>

33.5%は、想定していた稼働率である。平成30年度の稼働率は24.7%であったので、それを上回ればよいということで、想定範囲の稼働率であった。

<木曾委員>

去年の決算でも議論があったが、所期の目的は移住・定住施設として建て、あれだけの施設が出来上がった。非常に高額な施設でもあるので、十分、移住・定住という所期の目的に達していけるようにしてほしいということを行った。稼働率は33.5%ということであるが、実際に移住・定住で宿泊した人は何

人いるのか。

<ふるさと創生課長>

18人である。

<木曾委員>

907人の内訳で、移住・定住で来ていただいた方が18人ということだが、いろいろなイベントや婚活事業なども行いながら18人というのは、これも想定内なのか。それとも、もう少し増える予定であったが、やはりこの事業に関しては難しかったということなのか。課題はなかったのか

<ふるさと創生課長>

年度の前半はゼロで、後半の11月以降に増えた。本来なら、もっと年度の初めにも移住・定住で来ていただきたかったが、こちらのPRも少なかった。タルマーリーのイベントは前半の6月に行ったが、移住体験ツアーは2月に行ったので、少し残念であったと思っている。

<木曾委員>

年度末に駆け込みのようにイベントを行うのではなく、もっと計画性を持って、1年を通してやっていくべきだ。予算執行が年度末に重なってしまう傾向が、ここだけでなくほかのところもある。予算が認められたら、少なくとも6月ぐらいには実施できるようにやっていかなければ、18人から増やすことは難しいのではないか。年間バランスよく移住体験ができるようにしていかなければ、補助金などをもらっても生かすことができないと思う。計画をもう少し工夫すればうまくいったのではないか。

<ふるさと創生課長>

おっしゃるとおりである。平成30年度に運用が始まったときは、利益も上げるために観光にも力を入れようということで、観光客を入れることに力を入れて、移住の案内はあまりしていなかった。4月初めの頃も、稼働率を上げて収益を上げるために観光を頑張っていたが、やはり移住・定住促進施設なのでそれに見合った施設利用をしなくてはいけないということで、移住フェアやセミナーなどに力を入れたり、イベントなども行って頑張ったが、結果としては18人ということになった。

<木曾委員>

去年の評価で、目的にそぐわない形になっているので観光にしてしまえばよいのではないかと言ったにもかかわらず、やはり移住・定住だと振り切って、予算もその形の中で進んできた。前年度の経過から考えれば、整理をすべきであったと思っている。やはり我々が思っていたとおりの結果になった。観光にしたほうがよいと言ったのに、なぜそうしないのかという話にまた逆戻りしてしまう。我々の意見が一つも反映できていないと思うがどうか。

<ふるさと創生課長>

この施設の目的は、移住体験利用と観光振興と地域の活性化ということで、地域の活性化というのは、令和元年度はタルマーリーの講演会やモデルツアーを行い、地域の活性化につながり、移住体験利用者にも来ていただけるようなツアーなども開催した。まだ「離れ」にのうみができて1年余りなので、すぐに結果を出すことはなかなか難しいと思う。今年度から指定管理者制度を導入し、もう少し事業等も精査し、様子を見ていきたいと考えている。

<木曾委員>

この予算から見て、何人ぐらいであれば移住・定住事業経費をフォローできる人数になるという計算か。

<ふるさと創生課長>

目標であるが、30人ぐらいである。

<木曾委員>

目標に達していなかったということか。令和元年度に関しては、人数的には目標に達することができなかったので、今後の課題が残ったと理解してよいか。

<ふるさと創生課長>

令和2年度の目標が30人ということである。令和元年度については、実績が低かった。

<木曾委員>

移住・定住の実績はずっとゼロだったので、徐々にその取組をするということで予算を使ってきた。2年目になって、もっと取組をすべきだという議会からの指摘もあってやってきたが、年度末に事業が重なってしまったということで、結果としては18人とどまってしまった。今年度の目標は30人と言っているが、今の段階でどのくらい達しているのか。

<ふるさと創生課長>

令和2年度については、既に24人ぐらい来ていただいている。

<木曾委員>

24人ということで、コロナ禍の中で増えているとは言いながら、人数的にはまだまだである。30人の設定がどうかということは別にしても、やはりこの事業全体に関しては、まだまだ薄いと思っているので、今でもやはり移住・定住ではなく観光にすべきだと思っているがどうか。

<市長公室長>

議員の御指摘もよく理解している。ただ、もちろん移住・定住促進施設であるのでそういう目的もありながら、収益性を上げるために観光者や宿泊者を増やすという、2つの目標を持っている。その中で、来年ぐらいまではこのままいかせていただいて、コロナのことはあるが、世の中の変化、実績を見ながら、観光施設に変更すべきだと私どもが判断させていただいた場合に、そこでさせていただきたい。今年、来年を見た上で判断したいと思っている。

<木曾委員>

コロナの関係で、宿泊がゼロになったのかどうかは分からないが、指定管理者への補填も考えているのか。

<ふるさと創生課長>

補填に関しては、移住・定住の関係とふるさと納税の関係は補填させていただく予定である。5月から休館した分の運用支援については、9月補正で了承いただいているので、令和2年度についてはそのような補填でいかせていただきたいと思っている。

<市長公室長>

指定管理者ともいろいろと協議しているが、やはりコロナによって利用者がこの春は減少している。採算面でも、4月、5月は休館し、当初計画どおりにはいかなかった部分がある。ただ、9月以降は予約が回復傾向にあり、シルバーウィークも満室であった。指定管理者は、コロナが再発生すれば大変なことになるが、今の段階では指定管理料は変更せずに、自分たちの経営努力で進めて

いくと言っている。来年、再来年もその計画でいきたいと、今のところは思っている。

<木曾委員>

売上げが落ちた場合の政府による補填は、公的な施設には適用されないと聞いたが、そういうことなのか。

<市長公室長>

そうである。「離れ」にのうみは適用されないので、補正予算で休業補償分だけを予算化させていただいた。

<石野委員>

成果に移住者5人と書いているが、これは亀岡市に住所を移して住んでいる人のことか。

<ふるさと創生課長>

そうである。

<石野委員>

平成30年は2人、令和元年度は5人ということであるが、目標は30人と言われているので、まだまだ課題が多いと思う。

それともう1点、収益の補填の実態はどのようになっているのか。

<ふるさと創生課長>

コロナの関係については、40万円補填をする予定である。

<浅田委員>

空き家バンクに登録されたところに入っていただくのが、一番効率よく移住・定住につながると思うが、物件を見学されたがよいところがなかったのので、家を新築して移住された方がおられる。その方から、建物を建てるときに、何かうまく進まないようなことがあると聞いた。今後の課題で、分かっていることはあるか。

<市長公室長>

既存集落まちづくり区域指定制度も導入したが、都市計画法に基づく許可の手続が必要になるので、そういうところで難しいところはあると思う。具体的にどの部分がうまく進まなかったのかは分からないが、うまく進められるよう丁寧に対応するようにしている。

<三上委員>

平成30年度の稼働率をもう一度お願いしたい。

<ふるさと創生課長>

平成30年度の稼働率は24.7%である。

<三上委員>

先ほど、令和元年度はそれよりも上回ればよいと言われたが、稼働率の目標は立てていなかったのか。

<ふるさと創生課長>

令和2年度から指定管理者制度を始めて、令和5年度でゼロになるように、令和5年度までに採算が取れるようにしていく。

<三上委員>

令和元年度の稼働率の目標があったのかどうか聞いたかったのだが、不明だということで次にいきたい。移住・定住目的で利用された18人は、何組か。家族や夫婦で来られているのか。

<ふるさと創生課長>

8組、18人である。

<三上委員>

人数も大事だが、組数や稼働率も大事だと思う。資料としてはあったほうがよいと思うので、今後は入れていただくよう要望しておく。全体の利用の中で、僅か18人ということは2%である。当初は取りあえず観光でいけばよいと思われていたが、途中から、やはりこれも大事だと変わっていったというようにお聞きしたが、当初は移住・定住目的の割合の目標はなかったということか。

<ふるさと創生課長>

そうである。

<三上委員>

やはり中途半端な案件になっていると思う。どのように評価すればよいか難しいところである。先ほど、コロナによる減収分の補填のことは聞いたが、補填という意味には2通りある。超過収益での補填ということも書いてある。コロナで減収したから補填するというのは、補正予算で出され、一定理解できるところであるが、いわゆる移住・定住目的で来られる方は、格安で泊まれる。その格安の分を市が補填すると、上限が30人ということになっているということ。18人はその範囲内ではあるが、これにかかる経費はいくらになるのか。

<山本委員長>

指定管理者は今年度からになるので、事務事業評価とは関係ないが、参考に聞かせていただくこととする。

<ふるさと創生課長>

移住体験利用は、4月から8月分までで約40万円の補填である。ふるさと納税のほうは10万円余りの補填である。

<三上委員>

ふるさと納税のほうで10万円ということは、市の予算から出すのが40万円で、ふるさと納税から10万円ということか。

<山本委員長>

ふるさと納税の返礼で「離れ」にのうみに泊まれるというのがあり、申込みがあったときには補填するということである。

<三上委員>

今年はそれがこの後伸びるだろうということだが、どれぐらい伸びるか想定しているのか。

<ふるさと創生課長>

30人までの予定である。今は24人である。

<三上委員>

30人を超えれば、補填は一切なくなり、指定管理者で何とかするのか。それとも、打ち止めになって格安では泊まれなくなるのか。

<ふるさと創生課長>

30人を超えた場合は、指定管理者で何とか頑張るということである。

<三上委員>

今年度はどれぐらいまで伸びると想定しているのか。

<ふるさと創生課長>

50人近くはいく予定である。

<木曾委員>

資料に令和元年度・2年度の比較があるが、1泊の利用者が非常に多い。2泊はほとんどない。移住・定住のいろいろなイベントに参加してもらって、1日コースも2日のコースもあると思うが、内容を詳しく教えてほしい。

<ふるさと創生課長>

1日目は、お昼前後に亀岡に来ていただいて、移住者がつくられたレストラン、カフェ等で食事をしていただいて、亀岡市の概要をお話しさせていただく。午後は、空き家バンクを回ったり、先輩移住者が経営されているお店などを見て、「離れ」にのうみに宿泊していただく。2日目は、実際にスーパーや保育所、学校などの公共施設を回ったり、移住者が空き家改修をされた古民家を見たり、KIRI CAFEで亀岡市のいろいろな取組についてお話しさせていただき、最後に振り返りということでアンケートを書いていただいて、午後にはお帰りいただくというような内容である。

<木曾委員>

その全てにどれくらいの方が参加されるかは別にして、内容は大体分かった。参加はどこの方が多いのか。

<ふるさと創生課長>

令和元年度は、関東方面の方が8組中5組、京都市の方が2組。沖縄の方が1組。合計8組で18人である。

<木曾委員>

関東方面、沖縄の方も関心を持っていただいているようだが、それ以外のところについては、全くないように思うので、効果としてはどうなのか。ホームページだけではなかなか難しいのか。もう少し広報していく必要があるのではないか。

<ふるさと創生課長>

ホームページ、SNS、亀たんなど、いろいろと発信している。博報堂系のワンストーリーという有名なウェブサイトにも出して、亀岡の魅力の紹介等させていただいた。議会の一般質問でも出ていたが、ホームページを見やすいように改訂し、SNS等での発信も強化していきたいと考えている。

<木曾委員>

現地案内をするときには、何人職員がついていくのか。

<ふるさと創生課長>

婚活・定住支援係の係員が2人いるので、2人ついていっている。

<木曾委員>

職員も限られた人数の中でやっている。それ以外の仕事もあると思う。ふるさとガイドや移住・定住の内容を熟知した方に案内してもらうことが大事だと思うが、今年度はそれも充実してやっているということなのか。

<ふるさと創生課長>

京都府の職員が来ている場合もある。京都府の移住コンシェルジュ等の社員と一緒に、引き続きやっていきたい。

<木曾委員>

移住・定住に関しては、地方へ行けば行くほど、人口減少を食い止めるために一生懸命やっておられる。他市と比較するわけではないが、非常にまだ弱いと思う。弱い理由の1つは、観光の面と一緒にするからそういうことになってい

るので、移住・定住の分野はきちっと分けて専属でやる。観光は商工観光課に全て任せる。そのような組立てをきちっとやって、ここは移住・定住専門でやるという形に持っていくことは不可能なのか。

<シティプロモーション担当室長>

施設はどこかが管理しなければならないが、今も、移住・定住はもちろんふるさと創生課がやっており、観光利用については商工観光課や森の京都DMOにお願いしながら、一緒になってやっているの、そこはしっかり分けてやっているつもりである。

<木曾委員>

お金をかけている割には事業効果がないことに対して言っている。民間であれば、経費もできるだけ削減し、事業効果を上げるためにどうするかということ積極的にやって、結果を残してきていると思うので、シティプロモーション担当室長のアドバイスを受けながら、どうすれば民間的な感覚を行政として取り入れて、どのようにこの事業を完結すればよいかを考えるべきだ。行政がやれば、経費の問題も含めて、全部丸抱えでやっつけてしまおうという考え方がある。だから、事業効果が全然なくなってしまう。効果を表してこそ、税金を投入する意味が出てくる。移住・定住で年間20組、30組という実績が上がってくればなるほどと思うが、1年目は分からなかったし、2年目はまあよいか、3年目になって指定管理者を導入したので、何とか頑張れるだろう、そういう感覚ではなく、事業計画をきちっと立てて、やる気を持ってやらない限り無理だと思う。民間であれば、年間の事業計画、予算を立て、人数の配置も含めて計画を立て、それで実施する。それで、例えば2年なら2年、3年なら3年やって、できなければ縮小だ。それでもできなければ廃止だ。そういうことを身をもって感じられるようにならなければ、この事業は成功しないのではないか。全国各地、移住・定住で頑張っている。競争している。その競争と同じレベルにまで上がっていかない限り、目的に達することは難しいと思うがどうか。

<シティプロモーション担当室長>

そのとおり、民間は必ず目標設定をして、その達成率を計った上でレビューをして、次年度目標をする。今、計算してみたのだが、令和元年度が907人に対して令和2年度の920人というのは101.4%という数字であるが、これはコロナ禍なので仕方がないのではないか。民間企業が売上目標を立てるときは、普通は5%から10%アップをかけていく。令和3年度は令和元年度比率121.3%、令和4年度は135.6%、令和5年度は148.8%と、3年度から4年度、4年度から5年度は10%アップになっている。目標設定はどのような基準でやったか分からないが、無理だとは思わない数字だと読み込んだので、こういうところに目標設定していくには、どのような広報、PR活動がよいかということをやっていけばよい。本質に返ると、この主目的は移住・定住で、副次目的が2つ、観光で収益を稼ぐ観光振興、それと地域の活性化とがある。稼働率はビジネスなので、主目的は移住・定住だが、私はこれを第一義にしなければいけないと思う。黒字化になるのが令和5年度になっているので、これをいかに縮められるか。それと、18人、延べ8組の移住者がいたと聞いているけれども、907人中18人である。残りの900人弱の中に、移住・定住を希望する人がいないとも限らない。観光で来たけど、少し移住・定住も考えていて、来たらファンになったということもあるし、自分たちは移

住・定住するつもりはないが、こんなよいところがあったと友人などに口コミで伝えてもらえれば、亀岡の魅力を伝える宣伝マンになってくれるかもしれない。大切なことは、来た方々の分析が必要だと思う。アンケートをとって、もう少し突っ込んでいけば、この900数人のデータというのは財産になる。それをやっていくことがマーケティングの基本だと思うので、そういうことを職員の皆さんと一緒にやっていきたい。先ほど競争だと言われたが、全くそのとおりで、競争であれば、同じような環境のところの類似施設の移住率、移住人数を調べて、勝っているのか、劣っているのか。勝っている施設は何で勝っているのかを分析して、取り入れるものは取り入れていけばよい。そういうプランニングをして、次の機会には皆さんにきっちりした説明できるように、協力してやっていきたいと思う。

<木曾委員>

よく分析していただき、よく分かった。そのような説明をしていただければ、我々も納得できる。

<シティプロモーション担当室長>

補足であるが、令和5年度が1,350人で、稼働率は50%前後になると思う。年間稼働日数が1,098室なので、人数比率から手計算で算出したので合っているか分からないが、ほぼ間違っていないと思う。

<木曾委員>

あの建物の資産価値、どれだけお金をかけてきて、固定資産もどれぐらいかかっているかということも含めて、1回試算する必要がある。市の土地なので、税金はかからない。管理に必要な経費や、今までかけてきた経費は、宿泊料には全く入っていない。しかし、移住・定住という観点から言えば、それは度外視してもよいということになるのは分かる。だから、その分析をきちっとしておかないと、ややもすると曖昧になってしまって、公共施設を使って移住・定住をやっているのだから、観光も一緒に組み込めばよいという安易な考え方では駄目だと思う。税金を投入するということはどういうことかということ、分析しながらやっていただくことが必要である。そういうことを、議会できちっと説明していただきたい。我々は市民の税金を預かって、それを審査している。その審査が適切なのか、適切でないのかという議論であり、決してこの事業全体を批評するものではない。効果的なものになっているということであれば、これはよしということになるし、効果的なものでないということになると、ノーということになる。これからもよろしく願います。

<シティプロモーション担当室長>

収益を稼ぐ部分と、移住・定住、亀岡のブランディングのところでは情報発信のコンテンツになるというところがある。例えば広告費換算して、プロ野球に置き換えれば、親会社が宣伝料として赤字を補填するだけの効果があるかどうかというところで、数字を出せるかどうかは分からないがトライしてみたいと思う。私が亀岡に来る前に、博報堂の同僚から「離れ」にのうみはアレックス・カーさんがやっていると聞いた。私は、アレックス・カーさんのことを知らなかったが、山梨に住んでいるC・W・ニコルさんと同じような系列で、外国人目線から日本文化のよいところを発信する方で、それ以上の方だと聞いた。アレックス・カーさんを前面に出すということ、契約がどうなっているかがまだ分からないが、プランにして実行していければよいと思っている。



<木曾委員>

おっしゃるとおりである。アレックス・カーさんに監修していただいている。亀岡市から多額の投資をしているので、その分が跳ね返ってくるようにしなければ、してもらっただけで終わってしまえば無駄になる。よろしく願います。

<シティプロモーション担当室長>

先ほど課長が説明した、3月の亀岡を巡るツアーは、アレックス・カーさんに案内してもらっている。あの方ともっと一緒に取組をさせていただいて、移住ツアーもしていきたいと思っている。

<木村委員>

補助金はいつまで出るのか。

<ふるさと創生課長>

令和元年度で終わりである。

<木村委員>

移住者は5人であるが、何家族なのか。

<ふるさと創生課長>

1家族5人である。平成30年度の2人というのは、2組、1人ずつで、旧亀岡町である。

<木村委員>

どういう職業の方か。

<ふるさと創生課長>

職業は、申し訳ないが聞いていない。会社員である。

<木村委員>

先ほどから移住・定住の体験ということを言われているが、私は移住される方の目的が先に必要だと思う。例えば、カフェがしたい、農業がしたい。でも、会社員として亀岡に住んで京都に通いたいといった希望を持っておられるはずなので、それに応じた案内をすべきだ。調整区域のことも、後から言われても困る。最初に、こういう家があるが、こういうふうにしなければならない、亀岡市はこのような補助をする、改築されるのであれば幾らまで補助金が出るということの説明しなければ、予算もあると思う。「離れ」にのうみは、アレックス・カーさんが監修して6,000万円をかけたような家である。定年になった方が亀岡に別荘を建てたいと言われるのであればよい。私の先輩の息子さんは、馬路町で旧家を借りて、子どもさんも4人できたので、狭いからということで、200万円程度の予算をかけて旧家を改造して住んでおられる。それもやはり補助金が要るのではないかと思う。東京に住んでいる息子が今度帰ってくるといことがあれば、これも移住になる。そのような場合は、亀岡市が全面的に応援するというのもすべきではないか。今のままであれば、907人のうちの18人、たった2%のことで、あとは観光である。令和5年度に移住・定住で何人が達成できなければこの事業はやめるとか、観光にするとか。分けてやらなければ、市長公室も大変だと思う。移住・定住だけが市長公室の仕事で、「離れ」にのうみは観光でやったほうがよいと思う。民間であれば、赤字が出ればやめろと言われる。令和5年に黒字にできなければやめると言ってほしい。それなら令和5年まで待とうと思う。それぐらいの決意を持ってやってもらわないと、去年も事務事業評価をやって、一生懸命やってもらっているのは分かるが、民間と公務員とは考えが違う。民間は、目標達成できなけれ

ばやめさせられる。ボーナスにも響く。目標は30人ぐらいと会議で言えば、おまえ、何を言っているのかと言われる。しっかり頑張ってもらいたい。Uターンも、もっと考えてもらいたい。5年たったときに、黒字にならなくてもまた補助金を出すのか。

#### <市長公室長>

亀岡に移住を求めてこられる方は、まずふるさと創生課に来られる。そこで、新規就農したい、起業したいといった相談を受けて、新規就農であれば農林振興課や農業委員会と一緒に動いて、空き家も探しながらやっている。その中で、ちょっと亀岡に滞在してみたいと思われる方に対しては、「離れ」にのうみに泊まって、亀岡のよさを知ってもらうように誘導している。ただ、それだけではもちろん少ないので、移住フェアやSNSなどで、「離れ」にのうみに1回滞在して亀岡のよさを感じてもらいたいというようなPRをどんどん行っている。今後は、さらに事業化してやっていこうと思っている。というのは、コロナによって、都会でも地方移住に関心が高まっているという新聞報道もあり、内閣府では東京23区の調査で、35%の人がさらに地方移住への関心が高まっているという声もあるので、そういうところにもっと情報提供して、単に泊まって体験していただきだけではなく、具体的にリモートオフィスやワーケーションを考えておられる方に対しては、トライアルステイということで、1回泊まっていただけるように、事業として移住希望者を受け入れていければと考えている。平日の空いているときを活用して、週末は今までどおり観光客を受け入れて、両方うまくコントロールしながらあの施設を運営していったら、目標である令和5年度には、指定管理料をゼロにしたいと思っている。

#### <木村委員>

両方うまく運営するのは理想だと思うが、難しいのではないかと。「離れ」にのうみに泊まって、この家がよいのでこの家を建てようという人がいるかは疑問だと思う。それよりも、予算、目的、どのようなところに住みたいのか、そういうことをしっかり把握した上で案内すべきだ。18人は少な過ぎる。900人が泊まっていて、移住・定住でもっと泊めてあげたらよいと思う。目標が30人というのも低い。令和5年度に黒字にならなければどうするのかということは聞きたい。

#### <シティプロモーション担当室長>

もうかる施設であれば、民間がされると思う。国から移住・定住で補助金をもらっているけれど、それだけでは利益もないので、収益性を上げなさいというのが国の要請である。私たちも、それが城下町に設置する目的であったので、観光客も積極的に入れたいと思っている。令和5年度でゼロにならなければどうするかというのは、限りなくゼロになるまで、最大限努力をしていくつもりである。

#### <木村委員>

5年後に黒字にならなくても、予算はどんどんつぎ込まなければならない。だから、去年より今年、今年より来年、5年後にはやめるぐらいの勢いでしてもらいたい。確かに収益性があるなら民間がやるが、もうけはなくても赤字が出ないようにしていくべきだ。これまでに何千万円も入れている。回収とまでは言わないが、少しでも黒字になるように。病院経営も一緒である。予算は5億入れているが、去年から黒字になったことは努力だと思う。そういうふうに

していかないと、毎年、事務事業評価をしなければならないことになる。

<シティプロモーション担当室長>

令和5年度は、1,350人で差引き収支黒字になっているが、これは宿泊料だけである。あの施設では飲食提供していないので、雅さんからケータリングを頼んだり、近隣に食べに行ったりしていることを考えると、2つの効果がある。施設としての収入を負う部分と、先ほど室長が言ったように、市がなぜやっているかというところの広告効果、それと、周辺エリアに人を連れていく効果、経済効果というのも視点に議論しないと、それは宿泊の収益だけではないところがある。それが算出できるかどうかをトライしてみたいと思っている。

<木曾委員>

問題は、移住・定住で使うことでも、観光で使うことでもない。一緒にすることが問題である。一緒にするから、ややこしいことになってしまっているのではないか。農業をしたい人が試しに泊ってみたいのは田舎の農家で、そこで実際に体験し、農業振興のいろいろな施策を説明することで、移住・定住につながると思う。「離れ」にのうみを観光施設として管理し、移住希望者が泊まりたいということであれば、それに対する補填はすればよい。ただ、それだけのことだ。そういうことで進めて、稼働率も上げていけばよいと思う。亀岡のよさを知ってもらうのは、確かにいろいろなところを紹介することも大事だ。やっていることはそれでよいと思う。それを批判するつもりは一切ない。しかし、観光施設をなぜ管理するのかということを行っている。あれだけ立派なものをつくって、亀岡の古民家はこのようなところばかりだと勘違いされるだろう。古民家は結構お金がかかる。生活するためにはどのようなことが必要なかということも含めて、農業、商売、子育てなどの環境のところに泊まらないと、移住・定住にはつながらないと思う。そこがマッチしないから、人数が増えないのではないか。1回泊まったけれどもう1回行きたいという人が何人いるのか。これもまた、来年の決算で聞きたいと思う。そういうことも含めてやっていく必要があると思うがどうか。

<市長公室長>

自分が住む規模がどれぐらいかということも、確かに必要だと思っている。京都府の補助金で、移住促進区域の空き家を借り受けて、自治会とともに改修して、お試しの場所をつくるというのは可能であるので、そういったことはもっと増やしていきたいと思う。それは確かに実態に合っているので、やっていく。「離れ」にのうみについては、決して観光施設に持っていかないと言っているのではなくて、まだ立ち上げて2年足らずで、会計検査も来ていないので、移住促進をもう少し続けさせていただき、しっかり実績をつくった上で、観光施設に移すべきタイミングで議論させていただきたいと思っている。

<三上委員>

先ほど、競争力という点で、近隣自治体で同じような施設を持っているところとの比較が必要だと言われたが、京都府内で同じような施設を持っているところはあるのか。あるいは他府県でも、似たような事例はあるのか。

<シティプロモーション担当室長>

移住・定住として、観光施設を兼ねた施設を造ったのは、京都府では例がない。全国的には勉強不足で分からないが、調べて比較していきたいと思っている。

<三上委員>

私は、「離れ」にのうみの予算立てのときから反対していたが、移住・定住という目的とどうしても合致しないのではないかということが反対の理由であった。移住・定住も大事なので、市民の税金はもっと違う形で使うべきではないかという論点だった。今、第5次亀岡市総合計画を立てる時期であり、時は急ぐので申し上げたいのだが、人口スキームをどう設定するかというのは、計画を立てる上で非常に重要である。人口流入をどう促進するのかという点で、移住・定住はもちろん大事である。それから、自然減は仕方がないとして、社会減をどう抑えるか、流出をどう抑えるかということも必要である。もう一つは、出生率をどう上げていくかということも必要になってくる。この3者がかみ合わなければならないと思う。今、亀岡市は、それがかみ合っているのかどうかが見えない。総合プロデュースが必要だと思っている。数年前、特殊合計出生率2.88という岡山県奈義町に視察に行ったが、子育て世代住宅という住宅をつくっていた。市営住宅のようなものではなく、1戸建てのおしゃれな、若者が住んでみたいと思うような住宅を、格安の家賃で、子育て世代限定の団地をつくり、工業団地を誘致し、地元には高校がないので高校へ行く通学費も全額補助し、子どもが3人、4人、5人と生まれるたびに祝い金を倍増し、保育料は無料にしていた。小さな町であるが、子どもを何人も生みたいという声が聞かれた。明石市のように大きな都市でも、子育てや貧困世帯に対する大胆な施策で人口が増えている。そういった総合プロデュースをして、ホームページ等で発信する責任があるのがこの部だと思う。ところが、市のホームページの移住・定住のページを検索しても、空き家物件の案内しかない。どこかの不動産屋のような感じである。働くなら亀岡市、子育てするなら亀岡市、それは部が違ってくるが、そういう総合プロデュースをしないと駄目だ。移住・定住、流出を防ぐ、出生率を上げることが全部かみ合った打ち出しができるようにしてもらいたい。何かアイデアがあれば、我々も提供していきたいと思う。職員の皆さんは、SNS等で頑張って魅力的な発信をしてもらっているのはよく分かっているが、総合計画を立てていく時期なので、早急をお願いしたい。

<松山副委員長>

令和2年度からの見込みを立てているが、その根拠を教えてください。あと、目標30人の根拠を教えてください。

<ふるさと創生課長>

根拠については、令和2年度は368万9,000円の指定管理料になっているが、人件費が主である。

<松山副委員長>

運営委託料というよりも、宿泊者数の中に移住体験利用者の人数も含まれているということなので、この宿泊者数の見込みの根拠をお願いしたい。

<山本委員長>

令和2年度の宿泊者数の根拠を教えてくださいということである。

<松山副委員長>

令和2年度の根拠もそうであるが、令和3年、4年、5年というのは惰性の数字なのか。それとも、計画の中で練り込まれた数字なのかを教えてください。事務事業評価をするために、大切なところだと思っているのでお願いします。ONE@Tokyoや田舎暮らしの本に掲載したことがゴールではなく、掲載してどうだったのか、掲載したらどうなるかという目標に対してのどうだったのか

というのを、イベントもセミナーもそうであるが、いろいろと検証した上で、宿泊者数の見込みが出てくると思っている。どのようなポイントで見込みをつかったのかを教えてください。

<ふるさと創生課長>

前年度の実績を見ていき、大体1割ずつぐらいと見込んで数字を上げていっている。事業等については、前年度の改善を含めて、新しい事業を取り入れたり、いろいろな事業を考えたりしながら見込みを立てている。

<松山副委員長>

宿泊者数は、大体1割乗せてということだが、それだけでは困ると思っている。宿泊者に対しての1割と件数に対しての1割とでは、数字が変わってくる。目標30人は前年の事務事業評価でお示しいただいた数字だと思うが、これからもその30人を維持するのか。宿泊者数はどんどん増えていっているが、目標の30人は同じなのか。

<ふるさと創生課長>

今後、移住がもっと増えるのか、減るのか、どうなるか分からないが、移住は増えていくと予想しており、増えたとき、例えば30人が60人、70人になった場合は、また議会で協議をさせていただきたいと思っている。

<松山副委員長>

宿泊者数が増えれば、目標人数も増えていくということにならないのか。全体の宿泊者が増えれば、移住体験者も増えてくるはずだと思う。この見込みをつくったときに、どのような話でこの見込みに落とされたのかを教えてください。

<市長公室長>

移住利用は、今年度は30人に設定するけれども、もちろんこの施設をもっと稼働させ、移住・定住者を増やしていくために、件数も人数も積極的に増やしていくことを目指している。今、各年度の目標は出していないが、今後しっかり計画を立てたいと思っている。

<松山副委員長>

1人で来ても1組、5人家族で来ても1組であるが、組数は。

<市長公室長>

組数は設定していない。

<松山副委員長>

私は、家族で来られることのほうが多いと思う。家族が多いと見込むのであれば、家族向けの親子雑誌や子どものファッションブランドの雑誌に載せるというように流れていくと思う。シルバー世代の夫婦が多いのであれば、その世代の方が読むような雑誌に寄せていく。そういった情報、分析ありきの見込みだと思う。

<市長公室長>

今も、宿泊された方にアンケートをお願いしている。年代別、どこから来られたのかということは把握しているので、それをもっと積極的に活用して、案内を送ってもよいと言われる方には、移住案内、観光案内をしていきたいと思っている。

<松山副委員長>

競争という部分で、綿密に分析して戦っていかなければなかなか伸びないのではないかと思う。引き続き分析はお願いしたい。事務事業評価で上げている時

点で、資料としていただいていたほうがよかったと思う。

<市長公室長>

アンケートの分析をしたものがあるので、後で出させていただきます。

<松山副委員長>

そのアンケートを基に、この数字はつくられているということによいか。

<市長公室長>

それは反映できていない。

<シティプロモーション担当室長>

先ほど、類似競合エリアという質問があったが、2014年に大学院のフィールドスタディで京都府和束町に行った。5,000人前後の町だと思う。そこには移住・定住施設が民泊であった。あと青年の家のような施設があり、私たちはそこに泊まったのだが、茶畑に来ている方が3人、カフェをやった方が1人いた。今も継続してやっているかどうか、聞いてみようと思っていたところなので、キャッチアップして報告できればと思う。ただ、和束町は、亀岡より交通の便がよくないので、同じような条件のところを調べてみようと思う。

(質疑終了)

11:46

## 《評価》

<山本委員長>

これより、評価を行う。各委員は個人採点について、順次報告を願う。

・松山副委員長

必要性：1点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：1点

・三上委員

必要性：1点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点

・浅田委員

必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点

・木村委員

必要性：1点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点

・木曾委員

必要性：1点、妥当性：2点、効率性：1点、成果：2点

・石野委員

必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点

11:50

## 《総合評価結果のまとめ》

<山本委員長>

集計結果は、100点換算で38.3点である。評価基準が2「課題がある」となった。この評価点数、評価基準を踏まえて、総合評価結果について協議を行いたい。意見をお願いします。

<木曾委員>

前回に評価を出して、観光と移住・定住を分けるべきだということを経過があるが、いろいろな補助金の関係もあってなかなか難しいということだったので、仕方がないのかなと思っていた。しかし、やはりかなり課題があるので、「見直しの上縮小」とする。

<木村委員>

私も「見直しの上の縮小」である。観光との関係は、検討課題だと思う。

<三上委員>

前回、「廃止」と決定したときの意図は、所管替えということで出した。それは、今日の意見を聞いてもあまり変わらないと思う。皆さんの意見は、発展的な配置替えという方向で、このままやれということではなかったと思うので、「縮小」というのも違うという思いがある。項目としてはないので、「その他」としてしっかりと意見をつけたらよいと思う。

<石野委員>

指定管理者の関係も出ている。室長から、令和5年度まではやらせてほしいという声があったので、「見直しの上縮小」とする。

<浅田委員>

令和5年までという今後のこともあるので、「見直しの上継続」である。

<松山副委員長>

「見直しの上縮小」であるべきだと思っている。前回の事務事業評価でも、テーブルの上に乗せて話をしている部分と、見込みをつくる時の根拠や分析が見える化できていないところがあると思う。今のままでは、移住者も増えないだろうというところもあるので、「見直しの上縮小」すべきだと思っている。

<山本委員長>

皆さんの意見を聞いて、総合評価としては「見直しの上縮小」の意見が多かったということで、分科会としてはこのようにさせていただいてよいか。

— 全員了 —

<山本委員長>

総合評価に附帯する意見、改善点について、意見を願います。

<木曾委員>

「離れ」にのうみの経営については、民間の施設であれば稼働率を70%以上にしていかなければ採算が合わないが、そうすると移住・定住というのがおろそかになってしまう。本当に難しいところがあると思うので、どちらかに絞ってほしい。移住・定住は移住・定住策の中でやってもらいたいので、観光の色合いを消してもらうための「見直しの上縮小」という総合評価をさせていただいた。移住・定住と観光はすみ分けをして、「離れ」にのうみは採算ベースが合うようになるほうがよいと思うので、そういう意見をつけていただきたい。

<山本委員長>

観光と移住・定住の役割を分けて「離れ」にのうみを活用していくべきではないかということでよいか。

— 全員了 —

<山本委員長>

これまでの意見を受けて、室長から何かあれば願います。

<シティプロモーション担当室長>

先に話をさせていただきたい。議論が数字で終始したように思うが、コロナ禍という特殊事情があるということ、フィルターをかけていただいたほうがよいのではないかと思った。コロナ禍でなければ、恐らく、京都府や国が目標にしたインバウンドの数字や、国内旅行の数字でストレッチしていったと思う。

この数字が120%であればどのような議論になったのかと思った。それと、オリンピックも今のところは来年開催予定である。2025年には大阪万博がある。そのときにチャンスがあるし、逆に言えばコロナ禍も非常にチャンスである。ワーケーションや在宅勤務をするときに、環境が整っている場所ということで、そこで移住・定住を呼び込んでいくことができる。3～4年の中期計画を立てたら、幾つかのチャンスがあると思うので、それを皆さんに納得していただけるような、民間で言えば事業計画のようなものをつくっていきたいと思っているので、少し猶予をいただけるとありがたい。

<市長公室長>

この施設は移住・定住促進施設であり、また、観光利用も目指す。この2つの目的は変わらないが、非常に分かりにくいという御指摘があった。私どもも、その御指摘をしっかりと受け止めて移住・定住をしっかりとやり、観光については松山副委員長が言われたように、もっとデータをしっかりと持って、目標値も根拠を持って2つのことをしっかりと進めていくので、今しばらくはこのまま見ていただきたいと思います。

<木曾委員>

今、鳥山担当室長がおっしゃったように、コロナ禍であるということは分かるが、令和元年度の決算では3月分だけしか入っていないので、その判定は、我々はしにくかったのでこの結果だということを理解いただきたい。来年度は、おっしゃっていただいた分も評価ができるのではないかと感じている。

<山本委員長>

見込みをつくるときには、必ず根拠も添えて、また資料も提出していただくようよろしくお願いします。

<松山副委員長>

今、鳥山担当室長が言われたとおりだと思うが、ただ、日本のインバウンドのマーケット自体は2割弱である。観光で亀岡に来られる方は、外国人もおられるが、移住・定住という観点で見ると日本人がほぼ100%だと思う。そういった観点から、今後、進めてもらいたいと思っている。

<山本委員長>

それでは、移住・定住促進経費、移住促進施設事業経費については、本分科会の評価は4「見直しの上縮小」ということで、附帯意見としては、観光と移住・定住としての役割を分けて「離れ」にのうみを活用していただきたいということ付かせていただきたいと思う。

<三上委員>

総合評価を、多数決で一番多いものに、委員長の判断で決められた感じがある。私は、ほかの委員が言われていることとそう変わりはないが、「その他」という違う評価をした。納得はしているが、やはりそれぞれもう1回意見を聞いて評価を決めていくべきだ。「見直しの上縮小」ということであれば、観光と分けるということもあるが、移住・定住目的ではない利用者、900何人かの中についても、亀岡市の印象や住んでみたいという気になったかをリサーチすることと、私が一番引かかっているのは、令和元年度は、課長も正直に言われたが、当初はあまり移住・定住のことは考えていなかったが、途中からやり始めたということである。やるのであれば、パンフレットや資料などを部屋やいろいろなところに置くといった努力をすることも含めて、その目的に合致して



いるというところを見せてほしい。今後の運用の仕方については、また要相談だと思うので、そこは努力をしていただきたいということを意見として言うておく。

<木曾委員>

なぜ若者が亀岡を出ていくのか、そのリサーチができていない。亀岡に来てもらうことばかり考えているが、25歳から35歳ぐらいまでの人口流出が最も多い。そこが人口減少の大きな問題点である。そこを掘り下げて課題を洗い出し、課題を謙虚に受け止めて、克服していく必要があると思う。私が若者に聞いたところ、「亀岡には働くところがないのに、ここに住めと言われても無理だ。大阪や東京のような都会には、働くところがいくらでもある。」と言っていた。これが率直なことである。問題点を整理して、亀岡にも働くところがあるのにPRできていないとか、よいところがあるのに若者たちに情報発信できていないのであれば、それを糧にして、これからの移住・定住にもつなげていくように、後ろ向きでなく前向きに考えていけばよいのではないか。その観点で、「離れ」にのうみを活用する方法を考えるということであればよいと思う。そのような検証も何もないままに、どんどん進めていっても人口は減るばかりで、増えることはないと思う。移住者で人口を増やすというのは難しいと思うので、もっと真剣に考えていく必要があるのではないかと思う。これは、第5次亀岡市総合計画の中にもきちっと入れていかなければならない。人口減少の問題と併せて、移住・定住は語っていくべきだと思う。

<三上委員>

移住・定住促進経費に関わる意見としては、私が言ったことと、今、木曾委員が言われこと、私が先ほど言ったことも含めて、意見・改善に入れるかどうかは、委員長に精査していただきたいと思う。

<山本委員長>

精査をさせていただきたいと思う。以上でよいか。

— 全員了 —

<山本委員長>

理事者は退席いただいて結構である。暫時休憩する。

12:05

(市長公室 退室)

(休憩)

12:05~13:00

## (2) セーフコミュニティ推進経費

(総務部 入室)

13:00~

### 【総務部】

総務部長 あいさつ

自治防災課長 説明

13:15

### 《質疑》

<木曾委員>

論点は、セーフコミュニティの今後のことに集中すると思っている。今まで取り組んできた成果については、セーフスクールも含めて、実績が上がって、いろいろな形の中で効果が出てきているということで、非常に説明もよく分かったが、今後は、令和2年度の予算にも再々認証の事業費は計上していないということなので、その方向性で間違いないのか。議会の議論も踏まえて結論を出していただいたと思うが、もう一度確認したい。

<総務部長>

予算に上げていないのは、セーフスクールの事前審査の予算を上げていないということである。

<木曾委員>

セーフコミュニティの認証については、令和2年度に上がっていたのか。

<自治防災課長>

認証は5年に1回なので、事前審査は令和4年、本審査が令和5年になる。今回の200万円は、安全・安心な取組に要する経費として計上している。

<木曾委員>

篠町や馬路町など若干広がっているところもあるが、なかなか市域全体には広がらないという現状がある。それなら、今まで取り組んできた実績を踏まえて、それを継承し、いろいろな形の中でやっていけばどうかと議論してきたと思う。この予算は、取り組んでいただいた内容だと思うが、今後、認証に関する予算が出てくるのか。

<自治防災課長>

実際、認証を取るとしても令和5年度になる。令和4年度から事前審査ということになるが、昨年の事務事業評価の内容も踏まえて、セーフコミュニティ推進協議会と協議を重ねている。できることなら、事前審査をなしにして、極力費用がかからない方法で認証を取るということも一つあるが、現在、コロナ禍ということで、世界の動きが見えない。認証自体がまだ3年先なので、今のところは、取りあえず安全・安心な取組を継続して続けていこうと各委員長と話をしている。その先に認証があるのであれば、それも一つの方法だ。ただ、セーフコミュニティということを知らせることは大事なことであるので、安全・安心な取組を継続していこうと思っている。今、現状では予算としては計上していない。

<木曾委員>

来年度の話ということになると、第5次亀岡市総合計画になってくるが、セーフコミュニティというよりも、安全・安心のまちづくりのための一つの形だと思う。それを今まで実績として築いてきたことについては、一定の評価があったと思うし、それは努力していただいた結果であると思う。ただ問題は、このように事実を積み上げていくことによって、最終的に認証、再々認証もあり得るというような話になってくるのではないかと。議会としては、今までの実績を踏まえて今後どうするかということが一番大事だと思う。セーフスクールも終わったので、もう認証しなくてもよいと考えている。認証取得についての今後の方針をこの事務事業評価に充てていきたいと思うが、異議があってはいけないので、もう一度、認証についての考え方を、今まだ決定していないのであればそのように言うだけでいいので、答えていただきたい。

<自治防災課長>

昨年、事務事業評価を踏まえて、各対策委員長とも協議をさせていただいている。その内容としては、平成30年に認証を取った翌年であったので、すぐに次のステップというよりも、まずは地道に安全・安心の取組を各対策委員会で続けていこうというような内容であった。特にコロナ禍になって、自殺対策については今までとは違う内容も出てくると思うので、早速経済的な支援も含めた自殺対策委員会を開催したところである。このように、安全・安心な取組を今は進めたいと考えている。

<石野委員>

いろいろな事案が減少していると説明があった。亀岡市はこれだけ広い市域の中で、スタートのときに篠町、そして川東5町、それから今、小学校のセーフスクール、保育所という形で事業が進んできたが、亀岡市民全体にセーフコミュニティの理念が浸透しているのか。セーフコミュニティの町だという思いがない町が多いのではないか。そうであれば、セーフコミュニティの日をつくって全23町に取組をしてもらって、それで一定成果が出ればよいし、同じような状態であればやめればよいと思う。それでお金を使うのは、関係者に要るばかりである。亀岡市が認証をもらったからと飾っていても、町の中は安心・安全にはならないと思う。一度、セーフコミュニティ日本初のパイオニア的な存在でやっているということを市民全体に言ってもらって、事故やいろいろなことが少なくなるようにやっていただきたいと思う。そういう思いで、私は「見直しの上継続」であるが、継続はしてもらえばよいが、お金を使わずにできるように、もう15年ほどやってきているので、いろいろなノウハウを皆さん持っておられる。それを広げてやっていけばよいと思う。

<自治防災課長>

まさにおっしゃるとおりで、セーフスクールは曾我部小学校を中心に広げていただいた。認証は曾我部小学校であった。保育所は、市内全域で取った。昨年、ISOのように市の中で完結していけばどうかという意見をいただいたが、まさにセーフスクールは、学校や保育所の先生がおられるので、理念に基づいた安全・安心な取組をしていただければ、継続的に理念はできる。ただ、セーフコミュニティについては、市民がいかに亀岡市を安全・安心にしていけるかという意味合いもあるので、もう少しセーフコミュニティの認知度を高めるような取組は継続して続けたいと思っている。今は認証に向けての動きはしていないので、あくまでも各対策委員会に対しての安全・安心な取組の推進ということで、予算は計上している。

<三上委員>

別紙4、目的に対する成果は何かというところで、交通事故負傷者数は73.4%減少していると説明があった。これだけ見れば、減ったなと思うのだが、附属資料を見ると、国の平均も京都府の平均も同じようになだらかな曲線で減ってきているので、セーフコミュニティを推進することや認証を取得することの優位性がよく分からない。他市と比べて、亀岡市が認証を取得したことによって、例えば交通事故負傷者数や刑法犯認知件数や自殺率が他市よりもかなり低く抑えられているというようなデータはあるのか。

<自治防災課長>

認知件数が減っているというのは、当然成果として出るが、そもそもセーフコミュニティは、事故やけがを事前に予防する対策を講じるというのがスタート

にあり、いかに事故を抑える取組をしたかということに対する評価というのがある。特に篠町では、事故が起こってからであるが、道路に狭窄やハンプをつくったり、速度規制をしたりという環境の変化をいち早く取り入れたことに対する評価が与えられて、認証ということになっている。あくまでも、データに基づいて、何をすれば減るのかということが認証時の内容である。

<三上委員>

質問の意図とは少し違う。認証されるために必要なデータを聞いているのではない。認証取得の事業を進めてきたことによって、例えば交通事故が起こらないようにするのがセーフコミュニティであれば、起こらないようにすれば当然減るはずだ。私は、年ごとに、他市と比べて全部調べた。交通事故は当然、車の台数や人口が多いところのほうが多い。刑法犯罪もにぎやかなところが多くなる。同じぐらいの人口規模で同じような町で、京田辺市、舞鶴市、福知山市などと比べてみても、減っていく度合いはあまり変わらない。認証取得の取組を続けて、セーフコミュニティでやっていることで、とりわけ亀岡市が際立って減少率が高くなっているかということ、そうではない。だから、そのデータを持っているかと質問をしたのだがどうか。

<自治防災課長>

データがもしあれば、後で提出する。

<三上委員>

データそのものが欲しいというよりも、亀岡市はセーフコミュニティをやっているから、ほかの市と比べて明らかに減少率も高いと言えるものがあるのであれば、そのように書いてもらえばよいのではないかということである。

<山本委員長>

認証取得したことによって、他市に比べて減っていることが分かるように書いていただいたほうが、より分かりやすいということである。

<三上委員>

そのように言えるのか。

<自治防災課長>

ただ、防犯であれば、ゲートウェイ犯罪の最初の自転車盗をなくすことによって大きな犯罪を防いでいくということで、市で防犯カメラの設置をするようにという提言をいただいたり、乳幼児の事故についても、それまでセーフスクールでやっていたけれども、乳幼児の家庭内でのけがや誤飲、あるいは転倒などが多いということで、事業としては、乳幼児は家庭内に絞って啓発活動をしたというようなことも、データでは出ていないが、データに基づいた事業を各種対策委員会で行っている。

<三上委員>

こういうことが多いというデータに基づいてやっていることは、もちろん分かっている。要は、認証を取得することで、他市よりもいろいろなことが数として減るといっているのであればすればよいが、そうでないのであれば、その趣旨だけを生かして、引き続き安全対策を進めてもらえばよいのではないかという意見になると思う。あと、成果のところ、市民の認知度、意識度、それから参画度、こういうものが上がってくるはずであるが、何か持っているか。

<自治防災課長>

一例であるが、自動車のセーフティドライブプロジェクト、町を見守るドライ

ブレイクダウンに、100名以上の方に登録していただいた。また、セーフコミュニティ応援隊として、60名近い方に活動していただくということで、認知度としては大きな数字にはまだなっていないが、一定、理解を得られていると思っている。

<三上委員>

担当課の感覚的なものと、具体的に調査やアンケートをしたものとは少し違うと思うので、具体的なものがあれば教えてほしいと思った。まだまだ認知度を上げていかなければならないと言われたが、これだけやっても、恐らくセーフコミュニティって何と言う市民は多いと思う。意識調査はしているのか。

<自治防災課長>

2016年にアンケートを取っている。認知度については、「知っている」が約30.6%であった。このセーフコミュニティについての認知度を、もう少し上げていきたいと思っている。

<三上委員>

一度だけであれば、比較ができない。

<自治防災課長>

2007年にもアンケートを取っており、23.3ポイントであった。2016年は30.6ポイントであった。

<三上委員>

2割余りから3割になり、今、どうなっているかということである。それが、認証取得の取組をやるべきかどうかの判断基準にもなると思う。

<自治防災課長>

今年度と来年度は、安全・安心な取組をする期間なので、アンケート調査等を行い、また次のステップへ向かうのも一つの方法だと思っている。

<木曾委員>

認証を取る前に、5つの対策委員会の報告をしてもらったことがある。交通安全対策であれば交通安全協会の人、自殺対策であれば民生委員さんが主なメンバーであった。常にそういうことに取り組んでおられるところの委員さんがメンバーになっておられると私は理解した。ここはこの分野だということがよく分かった。各対策委員会というのが、本当に市民全体の中から委員になっていただいて、活動し、成果として上がっているのであれば、もう少し認知度も上がり、各町に広がっているいろいろな活動ができたのではないかと思うが、これ以上やっても限度がきていると思う。そうすると、このセーフコミュニティというのは、認証を取るための事業ということになってしまう。それはちょっと違うと思う。それぞれの5つの対策委員会の取組は、一生懸命しておられる。しかしそれが、セーフコミュニティという事業に関して実績が上がったものなのか、民生委員さんが一生懸命頑張って地域の中で取り組んでいただいて上がったものなのかというのが分からない。それを同時並行に、事故が減ったのはセーフコミュニティで取り組んだから、防犯についても成果が上がっているというのは違うと思う。防犯の関係は、防犯推進委員の皆さんと民生委員さんが連携プレーを取って、ひとり暮らしの高齢者に啓発しておられるからこのような結果になっているのだと思う。それは、セーフコミュニティとはちょっと違うのではないか。それは、その活動の中で、各町でやっていただいていることである。セーフコミュニティの意味が、認証を取って、事業費を予算として上げ

ていってやらなければならないものなのか。安全・安心のためであれば、例えば1,000万円でも2,000万円でも、要望されているところ、不安なところ全部に防犯カメラを設置していくということに切り替えていくほうがよいのではないかと思うが、そういうことに関しての議論はなかったのか。

<自治防災課長>

各委員長との協議の中で、まさにおっしゃるように、セーフコミュニティでこの事業をとということではなく、セーフコミュニティとしての安全な取組の活動の幅は広く、市民の身近にある様々な活動がセーフコミュニティであるということを、もっと市民に認識していただけるようにすべきだという意見もあった。この事業を取って、これがセーフコミュニティだということではなく、市全体で安全・安心な取組をしているという旗頭のようなもので、認証を取ろうが取るまいが、安全・安心なまち亀岡市のシンボルにするということもおっしゃっていた。

<木曾委員>

セーフコミュニティの認証を取る必要がなければ、安全・安心のまちづくりのための事業推進経費にしてもよいと思う。いろいろな取組をしていただいているところに、もう少し予算化をすとか、例えば、民生委員さんであれば、詐欺にあわないように事前に動いてもらうためのボランティア活動に対する支援などをしていくべきだ。セーフコミュニティという大きな枠があるからやっているということではなく、亀岡のまちは安心して暮らせるまちだということを標榜すればよいので、それがイコールセーフコミュニティとは、若干違うと思う。安全・安心なまちだということ、第5次亀岡市総合計画にも全面的に押し出す必要がある。あまりネームバリューにこだわるよりも、実質的にやっていただいている方々に予算を回していくほうがよいと思うがどうか。

<自治防災課長>

まさに安全・安心な取組を事業としている。安全・安心に対する意識の低下や、モチベーションが下がるということも心配される。認証はまだ先であるが、セーフコミュニティのまちを旗頭に10数年間やってきてくださった委員の皆さんもおられるので、これは何とか残していきたいと思っている。

<木曾委員>

安全・安心のまちづくりのフォローという点で言うと、犯罪被害者に対するボランティア活動もなかなか進まない。犯罪が増えていっているが、予算の部分で言うと、補助金の執行も130万円ぐらいしかなかったように思うが、本当にそうなのか。声が上がらないところに手を差し伸べて、もっと亀岡はいろいろなことがあったとしても安全・安心なまちだ、被害にあっても助けてもらえるまちだというイメージが、このセーフコミュニティの中に盛り込まれていたのか。

<自治防災課長>

特に防犯については、自殺対策委員会では予防ということで、経済的な助けも含めて、委員さんに入っただき、ふとした気づきも含めていろいろな面で被害者支援を検討していただいている。また、学生とコラボで自殺のポスターを作成している。今まで、男性は中高年、女性は高齢者の自殺が多かった。これは病気や経済的な要因もあった。今、コロナ禍で、若者がそうなっては駄目だという中で、若者の意見も取り入れたポスターをつくっている。見えないと

ころに手を差し伸べていくようなことも検討していきたいと思っている。  
(質疑終了)

13:46

## 《評価》

＜山本委員長＞

これより、評価を行う。各委員は個人採点について、順次報告を願う。

- ・松山副委員長  
必要性：2点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点
- ・三上委員  
必要性：2点、妥当性：3点、効率性：3点、成果：2点
- ・浅田委員  
必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：3点
- ・木村委員  
必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点
- ・木曾委員  
必要性：3点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点
- ・石野委員  
必要性：4点、妥当性：3点、効率性：3点、成果：3点

13:50

## 《総合評価結果のまとめ》

＜山本委員長＞

集計結果は、100点換算で50.8点である。評価基準が3「おおむね適正である」となった。この評価点数、評価基準を踏まえて、総合評価結果について協議を行いたい。意見を願います。

＜木曾委員＞

私は次の認証はもう必要ないと思っているので、そういう観点から評価を出した。必要性については一定理解できるし、ネームバリューが必要なことも分からないが、認証取得とイコールにはならない。今までのことを生かしながら、亀岡の安全・安心をつくっていくべきではないかという観点から、総合評価は「見直しの上継続」である。見直しというのは、この事業は認証は必要ないという意味で御理解いただきたいと思う。

＜木村委員＞

委員会論点のほうも、認証取得だけが問題で、ほかのことについては一生懸命やっただけなのでよいと思うのだが、認証を取るために、皆さんが一体となってやっていたというようなことも聞いたので、それに代わるイベントをされるとか、市民に活動を分かっていただけのようなことをされるとか、そういうふうにされたらどうかと思う。私も「直しの上継続」である。

＜浅田委員＞

これまでは地域の偏り等があったが、亀岡市全体で認知度を上げいかないと実績やいろいろな傾向が出てこないと思うので、そこはやはり周知徹底していく必要があると思う。セーフコミュニティという言葉が、認証しなくても使えるのであれば、私は継続していただきたいと思うので、3の「見直しの上継続」である。

<三上委員>

安全・安心は大事だと思う。この評価表にもあるように、関わった職員は2名ということで、担当が2名おられる。でも、2名だけでやっておられるのではなく、啓発活動は総出でやっておられる。ただ、やはりセーフコミュニティの認知度が、10数年間やってもそれほど上がらない。例えば市役所の中で、セーフコミュニティは自治防災課という感じになると思う。それよりも、例えば子どもの心と体を傷つけないプロジェクトのようなことでやれば、こども未来部や教育部ともコラボした全庁挙げてのものになるし、市民にも分かりやすい。だから、あまりセーフコミュニティという言葉にこだわらず、安全・安心のために引き続き努力いただきたいと思う。その中核に、担当課がなってもらうのも大事なことだとは思いますが、そういう意味で、見直しの上、再編し縮小していくような形で、自治防災課だけで音頭を取ってやるものではない形にしていくほうが、本当の意味で効果が上がるのではないかと思うので、4の「見直しの上縮小」とさせていただきます。

<石野委員>

私は「見直しの上継続」である。特に今まで15年間やってきているので、取組のノウハウも全部分かっている。亀岡市独自の施策として進めて、市民みんなに浸透するようによろしく願います。

<松山副委員長>

私は3の「見直しの上継続」である。理由としては、安全・安心のコミュニティづくりで、各対策委員会の方や自治防災課の皆さんにお世話になっているのは事実である。先ほど木曾委員からも、その分の予算を防犯カメラの設置に充てるという話もあった。私もそうあるべきだと思う。防犯カメラをつけるだけでなく、このカメラはセーフコミュニティがつけたというような、セーフコミュニティというワードを周知し、こういうことがセーフコミュニティの1つだということを見せていく。三上委員が言われたプロジェクトももちろんよいと思うが、カメライコールセーフコミュニティというぐらい、市民に分かりやすいような啓発も含めてやってもらうのが一番よいのではないかと考えている。

<山本委員長>

3の「見直しの上継続」が多かったが、三上委員は「見直しの上縮小」ということであった。何かあれば願います。

<三上委員>

一致できないわけではない。私はセーフコミュニティという言葉にこだわって、自治防災課だけで担当することで、安全・安心が図られるというものではないという意見なので、今後、見守っていきたいと思う。それと、認証取得がどうしても必要かどうかということも、後で意見をつければよいと思う。その辺が見直しというところで一致できるのであればよい。

<山本委員長>

言いたいことは皆さん一緒だと感じている。

<木曾委員>

ポイントになる論点の中身であるが、次の再認証は必要ないと一致するのであれば、それをまとめてもらえば論点がはっきりすると思う。

<山本委員長>

論点にもなっていた認証取得について、今後どのようにしていけばよいかとい



うことで、認証にこだわらなくてよいのではないかという意見が多かったと思うがどうか。

<木曾委員>

認証取得なしで、今後、このノウハウを生かして安全・安心のまちづくりを進めていくということが、大方の意見であったのではないか。それでまとめればよいのではないか。そうすれば、三上委員の意見もその中に全て入るのではないかと思うがいかがか。

<山本委員長>

今、言っていたように、認証取得にはこだわらずということで、分科会の意見とさせていただきたいと思うがよいか。

— 全員了 —

<山本委員長>

総合評価は「見直しの上継続」とさせていただく。総合評価に附帯する意見・改善点の意見をいただきたい。

<木曾委員>

再認証はしないという評価をしたということにすればどうか。

<山本委員長>

4回目の認証はもうしないということで、分科会として全員の意見が一致したということでよいか。

<三上委員>

1つはそれでよいと思う。ただ、皆さんは継続と言われたので、セーフコミュニティ活動の認知度や市民の意識を高め、市民参画、地域コミュニティごとに安全・安心を考えていくことが必要だ。コミュニティとついているのはやはりそういうことだと思うので、そこがどの程度できるかということになってくる。継続していくのであれば、認知度を上げて、市民がより積極的に参加するものにしていただきたいと思う。

<山本委員長>

2点上がった。認証取得については、もう認証は受けないという意見を付したいと思う。そして、認知度、また市民参画、市民の方に参加していただけるようなものに、今後は持って行っていただきたいということで、意見として付けたいと思うがよいか。

— 全員了 —

<山本委員長>

ここで、部長から意見を求めたいと思う。

<総務部長>

今、いただいた御意見を十分参考にして、これまでの経験、ノウハウを生かして、引き続き安全・安心なまちづくりを進めてまいりたいと思う。そして、その活動をもっと広く市民に理解いただけるような、認知度を上げるような活動も進めてまいりたいと思っている。

<山本委員長>

それでは、セーフコミュニティ推進事業経費については、本分科会の評価は「見直しの上継続」ということで、附帯意見としては、認証取得はしないということで、その認知度、また市民の方に参画していただけるような事業を進めていただくようお願いしたいと思う。

理事者の皆様は退席いただいて結構である。暫時休憩する。

14:01

(総務部 退室)

(休憩)

14:01～14:10

### (3) 生涯学習推進経費

(生涯学習部 入室)

14:10～

#### 【生涯学習部】

生涯学習部長           あいさつ  
市民力推進課長       説明

14:25

#### 《質疑》

＜山本委員＞

3点あるので、まず、生涯学習賞経費について質疑いただきたい

＜木曾委員＞

論点整理したとおり、生涯学習賞は亀岡に特化した人に授与するべきではないかということに尽きると思う。非常に著名な方を表彰して、亀岡市が生涯学習の確たるものだということを内外に示しているということもよく分かるが、今まで生涯学習を進め、定着してきたので、そういう観点からも、もう亀岡に特化して亀岡の人を顕彰し、そして生涯学習賞の名に恥じない形で表彰をするべきではないか。

＜市民力推進課長＞

予算のときにも、そのようなお話は何っているところである。生涯学習賞については、本市の生涯学習都市宣言の基本理念を、広く市内外に向けて発信する役割を持っていると考えている。そのため、毎年、優れた個人や団体を表彰することと併せて、大賞やゆうあい賞の受賞者に記念講演をしていただいている。生涯学習に取り組む個人や団体を市として応援することにより、亀岡市をさらに情報発信することにつながり、市民にとっても積極的にそのような方々との交流が生まれる機会でもあると考えている。市内在住者にこだわらず、広く募集することで、多種多様な生涯学習の活動とその意義を市民に伝えることができ、また亀岡の生涯学習もそこから広がっていくものだと考えている。全国から募集するということは、これまで知り得なかった研究者、また人物、新たな分野で活動する人などを発見し、またそういう素材も提供できると考えているので、幅広い見地から、優れた人材に巡り会える機会になると考えているところである。

＜木曾委員＞

言われることもよく分かる。全国の著名な方に、受賞の代わりに講演していただいているということもよく分かるが、それは別にコレージュ・ド・カメオカでもできることである。生涯学習賞をもらわれた人の名前は、それなりに聞いているが、顔見知りでもないし、どのような内容だったのかということもよく分からない。そのような方を軽々しく思えと言っているのではなく、貴重な講

演をしていただくのはよいと思うが、賞としてやっていくのは、ここまで19回やってきたので、20回からは地元亀岡の方に受賞していただいて、そして広く生涯学習を世間に発信していただくということがよいのではないかと思う。石田梅岩をはじめ亀岡からは過去にすばらしい方がたくさん出ておられる。そういった方を発掘するためにも、受賞を機に活躍していただける機会を与えるということが大事ではないか。亀岡市の貴重な財源を使ってやることなので、もう一度、再点検し、コロナ禍の今、重要なことは市民を喚起することだと思うので、そういう観点からも、亀岡に特化した人に受賞いただくということが望ましいのではないかと思う。例えば小・中学校の先生に選考委員になっていただいて、すばらしい評価ができる方もおられると思うので、そういうことも考えてはどうか。

#### <市民力推進課長>

生涯学習賞は、大賞とゆうあい賞は隔年でやっており、あと、共生賞と奨励賞とがある。市内からの応募もいただいているので、できるだけ亀岡の方の選考ということも毎回、注意しながら進めているところである。これまで53件表彰した中で、亀岡の方は22件であり、半分に達していないが、42%が亀岡の方である。今、言われたとおり、生涯学習賞は、全国、世界を視野に入れた取組をしている。いろいろな外交官やその事務所にも案内しているが、日本語でなく英語の案内をくれないかとまで言われて、そのようなことも対応し、日本の亀岡の取組ということで進めているところである。講演は、コレージュ・ド・カメオカでやればよいということであるが、もちろんこの大賞、ゆうあい賞の方には講演料を支払わずに記念講演をしていただいている。コレージュ・ド・カメオカクラスの講師を探すとすると、経費もかかり、なかなかその道筋が厳しいところがある。お金を出せば幾らでも来ていただけるが、そういうものではないので、ある程度の目安の中で、亀岡市の生涯学習というものを理解して来ていただけるということについて、賞を通じてそのようなことが図れると考えているので、広く応募していくべきだと考えている。

#### <木曾委員>

それは、課長がそう思っているだけで、市民がそう思っているかは別の話である。市民がみんなそう思われるのならよいが、我々が納めた税金を使ってよいと思われるのか。亀岡市の体面のためにやるのは違うと思う。上田先生も亡くなられて、上田正昭賞をつくって生涯学習賞に代わるものにすればよいと思う。一生懸命につくっていただいて、名誉市民にもなっていたので、そういう観点からも、イメージチェンジしていくということも必要ではないか。今までやってきたことを踏襲することがすばらしいことでも何でもないので、その時々状況に応じて変化させ、市民ニーズに応じていく、市民理解を得られるような形の生涯学習賞にするべきだと思う。著名な方に来てもらうには何百万円もかかるが、100万円で済んでいるという、そんな理屈でなく、本当にそれを予算化したことで、亀岡市民の生涯学習が広がりを見せたということであればよいのである。でも、そうはなっていなかったのであれば、もう少し身近な亀岡の方を評価して、生涯学習大賞というような大きな名前をつけなくても、上田正昭賞でよいのではないか。そういうことが、生涯学習の観点からやっていただいた上田先生を顕彰することにもなるのではないか。

#### <市民力推進課長>

おっしゃるとおりの面もあるとは思いますが、生涯学習推進審議会というものがあり、その中でこのことについて意見を求めた。以前配付させていただいた新しい第3次亀岡生涯学習推進基本計画の中で、生涯学習賞について触れられており、審議会答申の中のコメントとしては、「生涯学習については今後とも充実を図るとともに、その功績を次の学びにつなげるよう、取組を促進すること」というものであった。特に、委員にまとめていただいた答申の中では、「コレージュ・ド・カメオカや生涯学習賞は、亀岡市を勇気づけ、日本社会を活力ある持続可能なものにすることになると考えられる」と言っている。ただ、木曾委員がおっしゃる側面もないとは言えないと思う。そのことも踏まえて、もう少し事業化については検討を重ねていかなければならないと思っている。今までが全て正しいとは思っていないが、このような評価も一面ではいただいている。

#### <木曾委員>

生涯学習賞について、一生懸命取り組んできたという経過は分かる。ところが、いつの間に生涯学習に取って代わったのか、かめおか霧の芸術祭なるものが出てきて、生涯学習を薄めてしまうようなことになっていると感じる。世間に認めてもらうためには、著名な人でなければ駄目だから、そのためにこのお金を使わなければならないという理屈が通るのかを考えるべきだ。SDGsという観点からやっていくのであれば、20回を契機に生涯学習そのものをもう一度再点検し、上田正昭先生を顕彰する意味も含めて、再構築するほうがよいのではないか。審議委員の方の名前なんて聞いたこともない。大学の先生がされているのか知らないが、それだけ生涯学習が大事なのであれば、我々にも誰が審査をされているのか公表してほしい。それは透明化されているとは思いますが、ただ決まったことが2月に出るだけである。亀岡の中で一番大事なこと、今やるべきこと、これから第5次亀岡市総合計画をやっていく中で、本当にこの賞が必要なのかどうかということも含めて考えるべきだと思う。かめおか霧の芸術祭が大事なのか、生涯学習が大事なのか、SDGsが大事なのか、訳が分からなくなってしまい、どれもこれも大事だというのは分からなくもないが、あれもこれもやっていると、最終的には全部ぼやけてしまって、何もかも分からなくなってくる。ピンぼけしないように、絞っていくためにも、この生涯学習賞そのものをもう一度点検し、もう一度言うが今日の委員会の論点である亀岡に特化した人に授与すべきと私は考えるがどうか。

#### <生涯学習部長>

生涯学習賞の審査は、こういったチラシを含めて、どこの誰がどういう形で審査するというのを当然告知している。この賞自体の在り方であるが、これまでの決算、また当初予算のときに、同じような指摘、質問をずっといただいている。この事業は、選考委員の皆さんにお世話になり、過去の大きな歴史の中で動いてきた事業である。事業自体は、御存じのとおり、上田先生の発した事業である。しかし、この賞金を含めて、時代も変わってきていることも確かである。選考委員の中からも、ほかのところ比べて多いということも出てきている。もう一点、過去にも説明させていただいたと思うが、お亡くなりになった前生涯学習かめおか財団理事長の千さんから、これに使ってほしいということで寄附をいただいております。今、ゆうあい賞の賞金はそこから充てさせてもらっている。500万円の寄附をいただいた中から、ゆうあい賞50万円と

いう賞金を、既に7回出している。選考委員の方とも話を既に始めているが、一定その辺りが見直しの時期だと事務方的には思っているところである。ただ、本当に市民だけに的を当ててやっていくのがよいのか、賞金の額も含めて、20回からスタートできるかどうか、今ここで断言はできないが、いろいろな先生方の意見をいただきながら、予算の時点で一定の方向性を示させていただけたらと思う。

<木曾委員>

今、回答いただいて、かなり前向きだと思う。生涯学習賞については、賞金も含めて検討すべきだと何回も言っているが、審議会委員さんには議会の意見として言っているのか。

<生涯学習部長>

しっかりと伝えさせていただいている。

<木曾委員>

それでも、まだやろうということか。

<生涯学習部長>

一定、見直しの方向も考えていこうという認識はいただいている。

<木曾委員>

そのような認識があるのであれば、見直すべきだということを行政から言っていないと、なかなか変わらないのではないかと。変えたいからどのようにするかを検討してほしいと言わないと、一步も前に進まないだろう。委員さんは、つくられた人のこともあるので、なかなかできないだろう。上田先生には名誉市民にもなっていて、今まで続けていただいたので、そういう形も含めて変える必要があるのではないかと提案いただいたということを踏まえて、行政としてもこう思うということ言えば分かっていたらと思うのだが、それは今は言えないのか。

<生涯学習部長>

今、この時点で、20回からそういう形でいくということは、私の口からは言えない。ただ、議会からの意見は十分伝えている。木曾委員がおっしゃるように、審議会委員さんでは恐らく結論は出ない。我々行政側が責任を持ってその発案をしていくという形になると思う。今回の意見を含めて、再度お伝えする中で議論させていただきたいと思う。

<木村委員>

この間の講演を聴かせてもらったが、眠たくなるような話で、一部の興味がある人しか来られていなかった。ゆうあい賞は、そういう寄附金があるので仕方がないのかもしれないが、公費を使っているのであれば、もう少し身近な人で、多くの市民が喜んで、声をかけなくても自ら講演に来ていただけるようにしていくべきだと思う。評価されている審査員の方もおられるので、いきなりというのは無理かもしれないが、そのようにしていかないと理解が得られないような気もする。

<市民力推進課長>

選考委員の先生方も、実は、全て上田先生が選ばれた。上田先生の遺志を引き継いでおられる方がほとんどなので、再度相談、提案をさせていただきたいと思う。

<木村委員>

上田先生がそうおっしゃったのなら、やはり亀岡にもそういう方がおられると思うので、毎年そういう人を選ぶということだけでなく、来年度は亀岡限定で考えようとか、そういうような方向もしていただいたらどうかなと思う。

<山本委員長>

次に、俳句事業経費について質疑願う。

<松山副委員長>

俳句事業に関して、去年表彰式に行かせていただいた。生涯学習賞もそうであるが、亀岡市民が俳句を身近に感じて応募し、披露して賞をお渡しするという流れだと思う。俳句事業に関しては、どういう経過か昨年は京都御所でされて、来られている方も亀岡市民の受賞者はほとんどおられなかった。生涯学習の一環で、亀岡市のお金を使っているのであれば、京都御所でやらなくても、ギャラリーかめおかでやればよかったと思う。場所の話ではなく、そもそもこの俳句事業自体がなぜ必要なのかを聞かせていただきたい。

<生涯学習部長>

俳句事業の取組の経過は、平成31年度の当初予算で新規事業をする予定であったが、平成30年6月補正で計上した事業である。その理由は、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」の決定を受けて、時間的に厳しい状況であったが、タイミング等を総合的に判断し、補正対応として事業に取り組んだという経過がある。当該事業は、3カ年程度事業を実施するという事、そしてその後は、事業の効果等検証を踏まえて引き続き実施するかどうかを判断するという話があった。初年度は、補正計上ということであったので、単費を用いて実施したが、令和元年度は地方創生推進交付金事業の中に組み込める項目であったので、大河ドラマを生かしたイベント広告等による観光PRの一部として、交付金を充当して実施したところである。地方創生推進交付金も審査があるので、総合的な窓口である企画調整課で調整していただき、3年継続事業ということで、補助金は来年度で一応終わる予定である。ただ、この俳句事業については、特に亀岡の自然やいろいろな素材がある中で、光秀をきっかけとしたテーマを用いて日本文化に親しんでもらおうということで、特に小・中学生を中心に進めていきたいということで取り組んでいるところである。

<松山副委員長>

経過も分かった。

<市民力推進課長>

なぜ京都御所で表彰式をしたのかということであるが、1回目は、生涯学習賞贈呈式の前の時間に俳句大賞の表彰をさせていただいた。2回目は、もう少し取組の幅を広げようということで、京都御苑を管理する一般社団法人自然環境文化推進機構という、自然環境文化に関するいろいろな取組をされている団体と連携することができた。ちょうど山折先生の発案でもあった俳句事業であるが、山折先生に御指導いただき、京都の自然環境も味わってもらおうということ、そして日本の文化ということで、ただ単に俳句だけでなく、琴や三味線なども含めたシチュエーションで表彰式をしてみてもどうかという話があり、いろいろな文化団体とも連携しながら、この事業に取り組ませていただいた。俳句大賞表彰式と自然環境文化推進機構の事業を合同で行ったことで、広がりを持つような取組に広がったと考えているところである。

<松山副委員長>

今のお話を聞くと、宗教学者の山折先生やほかの組織、団体の方の意見でこうなったと思うが、亀岡市民の意見は全くどこにも反映されていない。私は表彰式に行かせてもらったが、坪内先生が俳句に関しての話がされた。その前に、時は今という短歌自体はよいが、俳句は邪道だという話をされた。私は別にそれをどうこうではなく、亀岡市のお金で、京都御苑まで借りて由緒正しき場所で表彰式をされたのに、課長は司会をされていたのでお分かりになると思うが、今の話だと市民の意向をくんでやられている事業でもないように思う。市民が俳句を出すことによって、生涯学習にひもづくものがあるのか。ただ出して、外に亀岡をPRして終わりになってしまうのか。今回の検証はどうだったのかを教えてください。

<市民力推進課長>

京都御苑で開催したことについては、いろいろな団体に協力いただき、新たな取組ができたという点では評価している。亀岡市民に向けてという点では、場所が離れるので、その点はよくなかったと思っている。今後の表彰式は、やはり亀岡ですべきだと思っている。あと、表彰式での話は、前回、木曾委員からも意見を聞かせていただいた。俳句を否定されているものではないと思っており、審査委員長の坪内先生と山折先生との対談の中で、俳句の中身を深めていただいたと思っている。その中では、俳句のよさや、亀岡市の取組にどのような俳句が寄せられて、どのような思いをみんな持っていただいたかというような講評もいただいている。それについては、そのとおりである。ただ、今、副委員長が言われたようなことは実際にあった。参加した方が印象を悪くされたということはあったかもしれないが、全体としては、俳句のよさを認識していただいたと思っている。俳句の生まれてきた歴史や経過の話であった。

<木曾委員>

そのようなことを言っているのではなく、あの場で言われたのは、俳句とはそもそも邪道だ、もともと下ネタから始まったという話をされた。なぜ表彰式でそのような話をされるのか。そもそも論の話は、違う場所で言うべきことだ。御所で表彰式をすることは似つかわしくないというような言い方もされた。浅田委員と3人が行ったが、課長も司会をしていたので分かるだろう。そんなことまで言われて、せつかく市長が一生懸命に前段に話をしているにもかかわらず、なぜぶち壊すような評価をされるのか。本当に頭にきた。

<市民力推進課長>

確かに俳句の生まれてきた歴史の経過とか、俳句をつくったと言われているがそれは恋歌であったとか、和歌や恋歌、俳句の成り立ちの中で、食べ物を題材にするのは下品であるというようなことを言われていた。それは歴史の変遷の中での評価であって、今は俳句として位置づけられているといういきさつの説明であったと思っている。

<木曾委員>

それは、講演など歴史の話をされるときであればよいが、表彰式なので、表彰式にふさわしい話をするべきだ。俳句を募集して、その俳句の表彰式でなぜそのような講評をするのか。全く分からない。評価としてはゼロ点だ。市民や一生懸命に応募した人にも失礼だ。専門家の先生にとっては、そのような話は当たり前なことかもしれないが、我々一般人が聞くと気分が悪い。一生懸命に考えて応募した小学校や中学校の子どもたちに説明できるのか。山折さんではな

く、審査の講評をされた坪内さんが言われたと思う。あれで、俳句大賞はぶち壊しだと思った。我々も何とかよい方向で行くだろうと思って、遠いところでもあるが出席したが、結局、印象に残らないことになってしまった。最後に市長が一生懸命にふるさと産品の野菜やお肉を渡しておられたが、あまり意味がなかったと思う。岡山から来られた受賞者もおられたのに、あのような形になったことは反省すべきだ。

<市民力推進課長>

確かに講評の中でそのような話があったのは事実である。

<木曾委員>

そのような話があったではなく、その話があったであろう。録音しているので、みんなに聞いてもらうこともできる。そのような話があったのか。それとも、その話があったのか。

<市民力推進課長>

一語一句どうということは、記憶が確かではない。講評の中では俳句になってくる経過、歴史的な話というのは説明をされていたし、食べ物を歌うことは下品で、歌われていなかったというようなことも言われていた。そういうことは記憶している。成り立ちの説明、文学的な話をされたと理解している。

<木曾委員>

表彰式で、小学校や中学校の子どもたち、一般の部の中で総評をしておられる。非常に高いレベルで、遠くからも応募いただいてありがとうだけでよかったのではないのか。それが表彰式に対する敬意であろう。審査員は、それほど偉い人なのか。応募した人が傷つくような、市長にも失礼なことになるようなことならやめたほうがよい。失礼としか言いようがない。それでも同じようにやると言うのか。

<市民力推進課長>

それぞれの俳句については、資料に記載のようなことは文面で講評をいただいている。その後、自然環境文化機構とのタイアップのセミナーがあって、その対談の中で、そのような話もたくさん出てきていたというふうに思っている。表彰式では前段の挨拶があったかと思うが、講評については、この資料のようなことを的確に言ってもらっていたと思っている。

<山本委員長>

事務事業評価に戻らせてもらう。質疑をお願いします。

<木村委員>

大賞や亀岡市長賞などがあるが、副賞24万2,736円と審査員謝礼を合わせて60万円ぐらい出ているが、この内容はちょっと多いと思う。どのような形で払われているのか。

<生涯学習部長>

審査委員は、8人お願いしており、市長、教育長が入っているので、それを抜くと6人である。報酬は、委員1人7万円。委員長だけは講評を書いていただくので12万円。審査員謝礼は47万円になっている。副賞は、亀岡牛などをお渡しした。

<木村委員>

47万円と言われたが、57万円と書いてある。10万円はどうなっているのか。



<生涯学習部長>

教育研究所とタイアップして、小・中学校の先生方に俳句を広めてもらう研修会を行った。そのときの講師謝礼が3万円。また、夏休みに俳句まち歩き教室ということで、大本本部を借りて親子で俳句を作る教室を行った。そのときに、審査員2人来ていただいたので、1人3万円ずつ6万円を払った。それと、大本本部に場所を借りたので、1万円を払った。それで7万円。合計10万円である。

<木村委員>

審査員謝礼が7万円と12万円というのは、ちょっと高過ぎるのではないか。何回ぐらい来ていただいたのか。

<生涯学習部長>

委員長が4回、委員は3回である。4,000句ほど応募があるので、それを全て1つ1つ委員が割り振って選考していく。二重句のチェックも全てかけ、これまで出ていないもの、使われていないものを確認し、審査を3段階行って決めていくということになる。大学の先生方の謝金は、1時間2万円から3万円というような標準単価表があるので、それに基づいて設定している。

<三上委員>

俳句事業は、担当課としては平成31年度当初からやるべく準備をしていたが、平成30年度の途中から急遽やることになったということか。その理由をもう1度教えてほしい。

<市民力推進課長>

生涯学習30周年の記念事業のタイミングと、あと2020年NHK大河ドラマ「麒麟がくる」が急遽発表されて、光秀にゆかりの俳句を事業化するタイミングということで、時間はないが補正予算を計上させていただき、事業に取り組んだということである。

<三上委員>

山折先生か誰かが、俳句事業をしてはどうかと市長に言われたので、やろうという話になったと聞いたことがあるが、それは間違いなのか。

<生涯学習部長>

山折先生から提案いただいたのは事実である。平成30年2月の生涯学習賞受賞記念講演のときに、そのような話をされた。それを受けて、平成31年度の当初予算審議事項として予定していたが、今言ったように「麒麟がくる」の決定を受けて、時間的に厳しいけれどもタイミングも大事だろうということで、急遽事業化したというところである。

<三上委員>

担当課としては、平成30年2月に進言を受けたが、その前から計画していたということか。そうではなく、平成31年からやろうと思っていたが、切りがよいから早くやろうと担当課で決めたのか。それとも、市長が指示されたのか。

<生涯学習部長>

平成30年2月、「麒麟がくる」放映の発表がまだないときに、知将である光秀を題材に俳句のまちというような打ち出しをしてはどうかとコレージュ・ド・カメオカの中で山折先生から提案があり、前向きに考えていくというのが市長の返答ではあった。その後、「麒麟がくる」の放映が確定して、市としても光秀機運を盛り上げるためにいろいろな事業に取り組んでいくことになり、

ほかの光秀関連事業とともに、俳句事業を補正予算に提案させていただいたという経過である。

<三上委員>

経過は分かるが、どうしても補正予算に上げなければならなかったのかということが、私の中では評価をするポイントだと思う。いまだになぜ途中からやったのかと思っている。4,042句のうち、市民の応募が1,836で45.4%と言われたが、小学生、中学生、一般別に言っていたきたい。

<生涯学習部長>

亀岡市からの応募数は、小学生が553句、中学生が1,153句、一般が130句、合わせて1,836句である。

<三上委員>

一般は130句ということは、割合はどれぐらいになるのか。

<生涯学習部長>

亀岡市からの全体1,836句の11.4%である。

<三上委員>

一般の応募の中の市民の割合は何%になるのか。

<市民力推進課長>

11.4%である。

<三上委員>

中学生全体の中で市内中学生の割合はどうか。

<市民力推進課長>

65.5%である。

<三上委員>

主催は亀岡市、共催が亀岡市教育委員会、市や教育委員会挙げての行事であり、教育研究所で先生方を集めて講習までされているので、当然これはやってくれという話であろう。例えば明るい選挙、防火ポスター、人権啓発推進でされている人権啓発の作文・ポスター・標語も、学校におんぶにだっこでやってくれということがよくある。でも、それはやれるものがやればよいことである。市民の割合が45.4%ということだが、一般は1割だ。これはどのように評価しているのか。

<生涯学習部長>

最初は7,000句ほど応募があったが、2回目に大きく減ったことは事実だ。その中で、一般市民の割合が低いということは、確かにPR不足だったと思っている。今年はチラシを作り、各学校に配った。裏面には、スタジアムにある大河ドラマ館のPRも記載し、光秀を市民に分かっていただくための取組も進めた。結果としては、令和元年度は応募が少なかったのは事実であり、今年は何れだけ応募があるか分からないが、今後とも、特に子どもたちに向けてPRを進めていきたいと考えている。学校に負担がかかることは申し訳ないところはあるが、やはり生活のあらゆる場面で、子どもどものときの体験、記憶はよく残っていると思う。亀岡は自然豊かであり、俳句は季語がある。いろいろな自然観は、何かを題材として使い、そのフィルターを通して自分の考え方として入ってくるということもあると思うので、家族のことや生活の自然など、あらゆるものが再現されて、大きくなったときにも思い出に残ると思うので、そういう意味からも、小・中学生の皆さんにはできるだけ参加してほしいと考えてい

るところである。

<三上委員>

やりたい人だけでは数%にもならないので、授業の一環でやらざるを得ない。亀岡市がやるといっても、先生方の負担だけでなく、教育課程そのものに負担をかけている。別に俳句が悪いとは思わない。それなりに値打ちのあるものだと思う。今日の論点である俳句事業は事業効果が本当にあったのかということに対して、参考にする数字だと思ってお聞きした。

<山本委員長>

ほかになれば、次に、ガレリアかめおか指定管理について質疑をお願いする。質疑の間に、個人評価の記入をお願いする。

<三上委員>

生涯学習かめおか財団への補助金ということで、いわゆる人件費でもある。それと、運営する上で使用料などの収益に過不足が生じた分を、年間2億円ぐらいつぎ込んでいると思うが、ガレリアかめおかができてからどれぐらいつぎ込んでいるのか。

<市民力推進課長>

ガレリアかめおかは、当初は市が直営し、委託料を出して運営していた。平成18年度から指定管理者制度を導入して、指定管理料で管理運営をするようになった。当初の委託料は、今、分からないが、ここ最近の指定管理料は、平成29年から令和2年度までの4年間で1つのスパンとして、1年に2億1,500万円の4年間ということで指定管理料を設定している。その前の平成25年から平成28年は、4年間の平均で2億1,000万円程度の経費がかかっている。今年には既に指定管理料を払っているため、平成29年から令和2年の4年間の平均を見ると、2億6,855万6,000円ということで、債務負担行為は2億1,500万円を設定しているが、もう少し精査し、光熱水費も含めて節減をお願いして、平均2億685万5,000円ということで、前期よりも低い数字で推移してきている。この指定管理料に加えて、施設を使ったときの使用料がある。利用料金制度を取っているため、ガレリアかめおかの運営にその利用料が収入として上がるということになる。それが、令和元年度は6,486万5,260円である。大体6,500万円から、多ければ7,000万円ぐらいの収入があり、それに指定管理料を足した額が、ガレリアかめおかの管理に必要な経費ということである。

<三上委員>

建ってから何年経つのか。2億円として、掛ける年数分、20年で40億円ぐらいということか。当初、大きな地球儀が回っていたり、豪華なステンドグラスがあったりしたが、全部なくなっていった。市民からは、使い勝手がよいのかどうかということも含めて、いろいろな声がある。このまま、潰れるまでは仕方がないのかもしれないが、今後も同じぐらいの指定管理料を出さないとやっていけないのか。今後の見通しを教えてください。

<市民力推進課長>

指定管理料を圧縮しようとするならば、やはり収益を上げなければならない。ガレリアかめおかの条例にも謳っているが、単なる学習提供だけではなく、観光物産の展示、道の駅もある。式典、講演会、会議、コンサート、いわゆるコンベンション機能を持たせて、口丹波地域の大きな事業も含めて展開していくべき

だということで整えられている。これまでは、利用収入が上がるような事業が少なかったと思う。今後は、収益が上げられる事業を組み込んで事業を実施していかなければ、いつまでも指定管理料に頼った体制になるので、その辺は見直し検討していくべきと考えている。

<三上委員>

コンサートとかと言われたが、実際、音響が悪いからできないと言って、音楽関係者はわざわざ京都市内や長岡京市文化記念会館で開催されている。響ホールで、時々、映画会などをされているが、音がワンワンいって、まさに響ホールだとぼやいておられる。そういうことを改善していこうと思うと、さらにお金がかかる。投資をしなければならないが、その予定は基本的にはないということか。

<市民力推進課長>

ギャラリーかめおかは10年経つが、これまでしっかりとした改修計画が立てられていなかった。最近、雨漏りも多く見られるようになってきているので、早く手を打たないといけないということで、今年度、大規模改修の計画を策定している。ただ、あの施設は、結構グレードの高いものがたくさん入っている。例えば空調設備にしても、作り置きをしているので、ダクトが通っていたり、様々な特別あつらえがされていて、簡単に付け替えることができない。そういうことも含めて、今、計画を練っているところである。それに合わせて、音響問題も、コンベンションホールも響いてどうしようもないと言われる。大広間は、マイクをデジタル化したので若干改善されたのではないかと思っているが、響ホールもコンベンションホールも、どのような改善ができるのか、今ある施設の中でどのような対応ができるのかも検討していきたいと思っている。

<松山副委員長>

大規模改修には、どれぐらいの金額がかかるのか。

<市民力推進課長>

公共施設等総合管理計画の中の個別計画があり、その中で、指定管理者である生涯学習かめおか財団が点検した結果であるが、大体8億円程度かかるという見積りが出ている。ただ、それは精査できていないので、現在、実施計画をつくり、緊急性を要するものを選定している。8億円はかからないと思うが、何億円かの経費がかかることになる。ギャラリーかめおかを閉めずに改修しようとすると、4年ぐらいはかかると言われており、財源は優良起債、補助金などを、今、当たっているところである。

<松山副委員長>

年間で多くて7,000万円ぐらい収益があるということだが、2億円というのは生涯学習かめおか財団に払っている費用だけなのでぞっとする。公共施設管理計画の中で、民間と一緒にやっていくことになっているにもかかわらず、このような事業に対してはなかなか手を引かない。生涯学習かめおか財団が、どこまで未来のギャラリーかめおかのことを考えてくれているのか。私は、8億円は安いと思った。この金額であれば、原状回復だけだと思う。10年、20年先にどのような施設があればよいかといった、未来の絵を描いた上での金額ではないと思う。精査はもちろんしていただきたいが、どのような機能をつくれば市民が使いやすくなるかを考えていただきたいと思っている。そういった情報収集は、現状、どのようなになっているのか。

<市民力推進課長>

ガレリアかめおか利用者の意見は、指定管理者が折に触れてアンケート調査をしている。音響については、備付けの音響設備ではよい音が出せないのので、業者に入ってもらったり、それなりの仕込みをすれば確保はできるが、そうすればまたそれに経費がかかる。そのような使い勝手についても、使用料金の中でうまくできるような方法はないのかということも検討していかなければならないと思っている。利用についても、9時から22時まで開けているが、朝は前倒しで鍵を渡して、利用者が9時に部屋に入れるような状況も確保している。やはり意見が一番大事であるので、意見箱を置いている。意見を踏まえて、よりよい施設になっていくように取組を進めていきたいと思っている。

<松山副委員長>

これから先を見据えた上でアンケートを実施し、かつ、その利用料金が適正なのかということも含めてもう一度改めて考えて、管理経費もしっかりと見直していくというようなことは考えているのか。

<市民力推進課長>

ガレリアかめおかの使用料については、条例を改正させていただいた。安くなる施設もあれば、若干高くなる施設もある。

<松山副委員長>

全体的に改修するならこれぐらいのお金がかかるから、それに対して最低これぐらい料金を上げないといけないとか、そういうことが計画の中で見える化できているのか。それを、生涯学習かめおか財団に管理してもらっているのだと言われたら、これは亀岡市の施設であり、市民が税金を払っているという話になってくる。その辺りの計画はどのようになっているか。

<市民力推進課長>

大規模改修の計画は、建築住宅課が公共目線の中での判断で、適正に見積もっている。

<生涯学習部長>

大規模改修工事にかかる経費を使用料換算するということであるが、何かで戻そうと思うとそれしかないことになる。工事経費がかかるから使用料もいくら上げるといような上げ方の精査はできていない。あくまでも公の施設なので、できるだけ市民に安価で使っていただく。しかしながら、過去の条件がずっと一定できていたので、一定の見直しをして、当然消費税絡みのこともあるし、高くてあまり使われなかった大広間等は若干下げたりしながら、基本的には使いやすくして、少しでも利益が上がるような形での料金設定ということで改正したが、投資に関してどうこうということまでは精査できていない。

<松山副委員長>

利用料がなかなか上げにくいとか、市民により広く使ってもらわないといけないということはあると思う。そうであれば、生涯学習かめおか財団に身切ってもらって、やっていかなければならない。そこの金額が適正かどうかをしっかりと見直しているのか。

<生涯学習部長>

生涯学習かめおか財団は民間であるが、固定経費の割合が、やはり人件費割合が非常に高い。諸規定があるので、なかなか給料カットはできていない。しかしながら、今回、生涯学習かめおか財団の組織も一部改正していく予定でいる

ので、その中で、将来的には、民間として営業成績を上げていかなければならないし、給与面の改定というのは必要になってくるのではないかと感じている。

<木村委員>

ガレリアかめおかを建てたときは、亀岡会館があったので、よい音響もつくっていない。今後、大規模改修をされるのであれば、私は文化ホールのようなものをつくってほしいと思う。なかなかつくれないということであれば、改造して、例えば吹奏楽の人が使えるぐらいのところをつくればどうか。大広間とコンベンションホールと響ホールがどれだけ稼働して、どれだけ収益が上がるかというのは大事だと思う。市独自で考えるのではなく、いろいろな団体の意見を集約して、全ての要望を聞けるわけではないが、聞けるだけ聞いて、市民が使いやすい、使ってもらえるようなホールをつくるべきだと思う。もっと市民にたくさん使ってもらえて、喜んでいただけるような改修をすべきだと思う。

<市民力推進課長>

ガレリアかめおかコンベンションホールは、当初から音楽ホールではなく多目的ホールである。おっしゃるとおり、当時は亀岡会館という音楽ホールがあったが、今は耐震の関係でなくなったので、多くの団体から、多くの署名を集めた要望も、既に何回もいただいている。当然、その必要性は我々も十分感じているので、それが本当にガレリアかめおかに引っ付ければよいものなのかどうかを含めて、市民の意見を聞いて、公共施設の在り方を検討していくべきだと思う。

(質疑終了)

15 : 44

## 《評価》

<山本委員長>

これより、評価を行う。最初に生涯学習推進経費（1）生涯学習賞の評価をお願いします。

・松山副委員長

必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点

・三上委員

必要性：1点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：1点

・浅田委員

必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点

・木村委員

必要性：2点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点

・木曾委員

必要性：1点、妥当性：1点、効率性：1点、成果：1点

・石野委員

必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点

<山本委員長>

次に、生涯学習推進経費（2）俳句事業経費をお願いします。

・松山副委員長

- 必要性：2点、妥当性：1点、効率性：1点、成果：1点
- ・三上委員
  - 必要性：1点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：1点
- ・浅田委員
  - 必要性：2点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点
- ・木村委員
  - 必要性：1点、妥当性：1点、効率性：1点、成果：1点
- ・木曾委員
  - 必要性：1点、妥当性：0点、効率性：1点、成果：0点
- ・石野委員
  - 必要性：2点、妥当性：2点、効率性：1点、成果：1点

#### <山本委員長>

次に、生涯学習推進経費（3）ガレリアかめおか指定管理をお願いする。

- ・松山副委員長
  - 必要性：2点、妥当性：2点、効率性：1点、成果：1点
- ・三上委員
  - 必要性：2点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点
- ・浅田委員
  - 必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点
- ・木村委員
  - 必要性：2点、妥当性：3点、効率性：3点、成果：2点
- ・木曾委員
  - 必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点
- ・石野委員
  - 必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点

15：50

### 《総合評価結果のまとめ》

#### <山本委員長>

生涯学習賞は40点、評価は2「課題がある」、俳句事業は26.6点、評価は2「課題がある」、ガレリアかめおか指定管理は45点、評価は2「課題がある」となった。今、3つの事業について個人評価を出していただいたが、この評価点、評価基準を踏まえて総合評価結果を協議していきたい。総合評価については、この3事業を合わせた生涯学習推進経費ということで総合評価結果を出していきたいと思うが、3事業を一緒に考えるのは難しいと思うので、「その他」という総合評価として、後で総合評価に附帯する意見、改善点のところの一つずつに意見をつけていただくという形になるかと思うが、意見をお願いする。

#### <三上委員>

「その他」で、それぞれに意見をつけたいと思う。

#### <木村委員>

ガレリアかめおかは、今後の在り方を考えていくべきで、必要性もあると思うが、全体的に2「見直しの上縮小」である。

<木曾委員>

私も「その他」で、後は個々に言う。

<石野委員>

「見直しの上継続」である。

<浅田委員>

「見直しの上継続」である。

<松山副委員長>

私は「その他」で、それぞれ評価は2であるが、意味合いがちょっと変わる部分もあると思うので、個々に意見をつけていけばよいと思う。

<山本委員長>

「その他」で意見を付していくという方が3人、「見直しの上継続」が2人、「見直しの上縮小」が1人である。「見直しの上継続」にされた石野委員から意見をいただきたい。

<石野委員>

生涯学習賞ゆうあい賞は、あと3回ほどで寄附いただいたお金が底をつくと言われた。その時点で考えなければならないので、そこまで継続と思っている。それと、俳句事業も、あと来年で3回と言われたので、これもそういう意味で見直しの上継続である。ガレリアかめおかの今後のことであるが、これは縮小することはできないと思うので、見直しの上継続である。

<山本委員長>

俳句事業は、3年と言われたのは、補助金がつくのが3年ということか。それとも、事業として3年を考えておられるということか。

<浅田委員>

全て継続であるが、生涯学習賞はできるだけ亀岡に特化した人を表彰すべきではないかということで、今後も引き続き考えていただきたい。俳句事業については、私も表彰式に出席し、いろいろと感じたこともある。しかしながら、大賞を取られた方は、俳句によって私は助けられたということをおられたので、高齢の方であったけれども、亀岡市以外からも応募があつて、トータルで4,000句あるということは、やはりできるだけ継続の方向でやっていただきたいというのが私の意見である。ガレリアかめおかについては、縮小は無理だと思うので、これも継続ということである。

<木村委員>

生涯学習賞は、経費がかかり過ぎているように思うので、もう少し縮小し、亀岡に特化した人に賞をあげたいと思う。俳句事業についても、同じく、全国から募集しているが、表彰式に行かれた委員の話の聞くと事業効果があつたのか疑問に思うし、今後、補助金もあと1年ということなので、縮小の方向にしていだけたらと思う。ガレリアかめおかは、今後の在り方は継続であるが、考えてやっていっていただきたいと思う。

<木曾委員>

「その他」と言ったが、生涯学習賞は完全に見直しすべきだと思う。見直し縮小になると思う。俳句事業は、やめたほうがよいと思う。亀岡市の応募も少なく、苦勞されている割には事業成果が上がっていないし、講評でもあのようなことになっていることは非常に残念だと思うので、私はすぐに廃止すべきだと思う。これは5に近い形になると思う。ガレリアかめおかは、改善する必要がある



あると思うが、見直しの上、今後継続するにしても、指定管理を生涯学習かめおか財団に丸投げしていくのかということも含めて、今後は民間も含めてやるべきだと思うので、そういう面で見直しの上継続という形になる。3つがばらばらで1つの評価ということにはならないので、「その他」とさせていただいた。

#### <三上委員>

生涯学習賞については、木曾委員とほぼ同じような意見である。市民にとって、生涯学習というものの大切さや、市民活動を支援していく事業も別途あるが、その応募も減ってきている。この賞を続けていても、市民自らが学んでいこうとか、生涯勉強していこうということとの関連が見えないので、別の方法を考えていただきたいと思うし、残すのであれば縮小していただきたいと思う。私のつけた点数は、かなり問題があると課題があるということで、半々ぐらいだと思っている。俳句事業についても、年度途中でやっても7,000句余りの応募があった。そして、年度当初から取り組んだ2年目が4,000句余り。市民が130句。ほとんどが学校教育に委ねている。これはもう生涯学習ではなく学校教育だと思う。効果は1を付けたが、残すのは残してもよいと思うが、パフォーマンスで京都御所へ行って仰々しく表彰式をやるようなことは必要ないと思う。市民から応募があったものについて、しっかりと評価してあげるようにしなければ、結局、市外の人からもらえるから応募しなくてもよいという話にもなると思う。ほかの所管で同じような事業があると思うので、そちらでそういうレベルにまでしてもらえばよいと思っているので、見直しの上縮小である。ガレリアかめおかは、公共施設総合管理計画でどうなるか分からないが、文化ホールを別につくるというよりも、複合的なものをガレリアかめおかにつくるのも手だと思う。ところが、今回の補正予算でガレリアかめおかの屋上に遊具や遊び場をつくるということが出ている。そうすると、すぐには潰せなくなる。形も変えられなくなり、方向性が定まっていけないような気がする。ガレリアかめおか単体の問題ではなく、公共施設総合管理計画マネジメントとも合わせた形で早急に手を打って、このまま大規模改修を続けていって、改修のお金プラス毎年の2億円をどんどんつぎ込んでいくということにならない方向を願っている。そういうことを意見として出したい。

#### <松山副委員長>

生涯学習賞選考委員に、生涯学習かめおか財団理事長で大学名誉教授の井上さんが入っている。この前、ガレリアかめおかで講演された人は、石田梅岩先生や上田正昭先生の話は一切されなかった。生涯学習のまち亀岡に来て、こういった賞をもらって講演するのに、なぜそのことを言われなかったのかと思った。市民からも、ユネスコの話だけでなく、生涯学習の話をしてほしかったと言われたので、しっかりと見直しをしてもらいたいと思っている。より亀岡市民のためになるものにするために、どうすればよいかということも、もう一步踏み込んでやってもらいたいという思いである。見直しの上縮小でもあり、その他、見直し、改善というところである。俳句事業は、私もやめてもらったほうがよいと思っている。亀岡市が主催し、教育委員会も後押しして、先ほど三上委員も言われたように、学校の先生も本当に大変だと思うし、ましてや表彰式のような発言をされて、受賞者の気持ちになるととても悲しい。これはもうやめるべきであり、恥ずかしいと思う。ガレリアかめおかは、公共施設から民間

のベンチャー企業などに移管して、そこでまず収益を生んで、収益を生むことだけが全てではないと思っているが、収益を生むためにどうすればよいかということに頭を使う。そして、そこに人が集まる。人が集まって、そこで生涯学習が成り立つ。そこでスポーツが育まれるなど、複合的な考え方があると思うので、公共施設管理計画では個々の施設ごとに計画していくという話であるが、そういった視点も含めながら、生涯学習賞の選考委員をしている理事長が勤める財団ではなく、ほかの企業に募集をかければもっと活性できると思うので、亀岡のためにもっと考えていく必要があるのではないかと思う。6ではあるが早急改善である。

#### <山本委員長>

生涯学習賞については、市民に受賞してもらいたいという意見であったと思うので、それを意見として付していきたい。俳句事業については、意見が分かれた。全国から応募しているが、効果が本当にあるのか疑問であり、もうやめるべきだという意見と、残してもいいけれども、市民の中から応募していくことがよいのではないかという意見が出たが、その点について議論いただけたらと思う。

#### <木曾委員>

俳句事業は、前の年の生涯学習賞のときに、山折さんが市長に声をかけられ、市長は二つ返事でその話に乗られた。ところが、その評価が下ネタの話だなどと言われたので残念、それに尽きる。確かに受賞者は、今、浅田委員が言われたように喜んでおられた人もある。俳句はすばらしいと思って応募されたと思う。でも、評価をする委員長がそのような考え方であるのにもかかわらず、あのよう言われたというのは本当に涙ぐましいと思った。事業を始めたきっかけは、我々も含めて市民にも相談なく、補正で決めたという経過がある。ところが、後で国の予算がついたからやるというようなことを言っている。この考え方自体が、市民や議会から要望があったという地に足のついた話ではなく、思いつき、行き当たりばったりとしか思えない。だから、あのような評価の仕方しかできなかったのではないか。それが非常に残念である。補助金があるかないかは別にして、1回スタートに戻して、本当に必要なかを考えるべきである。募集も学校に負担がかかっている。一般の応募が、1,000句余りのうち100句余りと僅かしかないということでは情けない話である。それが本当の俳句大賞になるのか。大河ドラマも終わってしまうと、火が消えたような寂しい思いをするので、1日も早くゼロに戻し、審議し直して、市民が俳句はすばらしい、コロナ禍でもやるべきだ、今、優先すべきはこの俳句だ、俳句で盛り上げようと言われるのであれば、やればよいと思う。そうでなければやめればよいのではないかというのが私の思いである。

#### <三上委員>

俳句大賞で、別に盛り上がらなくてもよいと思う。全国から募集し、市民の応募は130句しかないという現状は変えていかなければならないと思う。規模を広げれば広げるほど、にぎわい、亀岡市のセールス、パフォーマンスのようなことになり、市民の生涯学習からかけ離れていくのではないかと心配している。市民を対象にして、審査員も市長や教育長、亀岡に住む有識者に謝礼程度でお願いし、表彰式も仰々しくせず、俳句をやっていてよかったと市民に思ってもらえるような行事にすればよいと思う。

<山本委員長>

ほかになれば、俳句大賞は、補助金もまだ3年あるということもあり、学校に結構負担がかかっているの、学校に任せるよりも市民を対象に続けていくということによいか。

<木曾委員>

学校を通した募集をやめると、市民の応募は100人余りということになるのに、これだけの経費をかけてやる必要があるのか。市民から3,000人ぐらいは応募があると責任を持って言うのであれば、3年間の事業であるのでやればよいと思うが、そう言えるだけの自信はないと思う。市民のための事業とは言えないのではないか。

<浅田委員>

募集を市民に限定すると、確実に応募が少なくなると思う。第1回目で賞を受けた男性が、毎年頑張って応募すると言われたことが印象に残っているが、人数が少ないと、経費をかけてやるのは問題があると思う。どの程度で今後も実施するか、一定のラインが分かりかねる。

<三上委員>

市民だけを対象にした結果、応募が少なくてやめたほうがよいということになれば、それはそれでよいと思う。でも、俳句をやってよかったという市民がいるのであれば、市民にとってどうなのかという点で、効果はゼロではない。成果もゼロではない。国は、使ったお金の半分を補助してくれるということであり、全国区にしなくても半分は出る。今、100万円余りを使っていて、60万円余りの補助金が出ている。それが20～30万円しか使わずに、補助金が半分の10万円余りということでもよいと思う。本当に市民が大事だと思うかどうかは、市民対象にしてやってみなければ見えてこないと思う。今年と来年は国の補助金が出るので、大きく見せることよりも、市民対象にして、子どもたちも、学校に強制せず気軽にやってもらえばよい。それで、箸にも棒にもかからないということであればやめたらよいし、それでも細く長くやっていくのであれば、生涯学習の一セクションとして大事な文化の一つではあると思う。失礼なことを言われた人のことは分からないが、俳句を好んでやっている人もいるし、川柳も、サラリーマン川柳や高齢者の川柳なども出ているので、一つの文化になっている。そういう点では、いろいろなことがあってよいと思う。

<木曾委員>

今、意見を言っていたので、それでよいと思う。条件をつけたいと思うのは、一つは学校に一切負担をかけないこと。自由に参加してもらうことはよいが、学校もコロナの関係で、授業なども非常に少なくなっている。修学旅行もなくなったのに、また負担をかけることはしないしてほしいと思う。もう一つは、市民を中心に募集をかけること。いろいろな意見を聞かせていただいて、俳句を別に否定するわけではないので、一般募集をそのようにしていただければ、縮小して継続することはやむを得ないと思う。

<石野委員>

国の補助金があと1年は出るの、少しでも多くの市民に参加してもらえるように、いろいろと方策を考えてほしい。その後も続けられるか、もう1回で終わるのかは考えなければならないと思う

<松山副委員長>

今、三上委員が言われたことも、確かにそう思う部分もあるが、応募者の人数から判断していくのは非常に難しいと思っている。亀岡の人口の半分が応募されれば誰もが納得するが、30人とか40人であれば、価値あるものなのかどうかは分からない。補助金のこともあるが、市民対象ということは絶対に必要だと思うし、その上で、何人以下ならやめると言うことは難しいので、今、このタイミングで1回やめるという判断をしてもよいのではないかと。そして、別の形で、市民から要望があれば、新たにつくっていけばよいと思う。1回リセットすべきだと思っている。

<木村委員>

学校の協力がなければ、かなり数が少なくなるので、私は違うことを考えたほうがよいと思う。

<山本委員長>

次に、ガレリアかめおかについてであるが、大規模改修計画を立てられるので、その改修とともに、管理経費も今後しっかりと考えていただきたいという意見が出た。管理経費について意見をいただきたい。

<木曾委員>

160億円ぐらにかかっている建物である。メンテナンスで8億円と言われたが、それでは到底賄えないと思う。市庁舎も100億円かかっているが、大幅に修理するには、空調など全部を直さなければならないので相当なお金がかかる。ガレリアかめおかは、雨漏りしているということであれば、余計にもっときちっとやっていかなければならないのではないかと。将来が心配だと思うがどうなのか。

<市民力推進課長>

8億円というのは、自主点検された中で、緊急的に改修すべき点についての見積りである。それを基に、現在、市の建築住宅課と一緒に査定をしているところである。

<山本委員長>

6「その他」にして、それぞれに意見を付していくことにしてはどうかと思うが、意見をいただきたい。俳句事業は、リセットしたほうがよいのではないかとという意見もあったが、まずは評価を決めないと、次に付す意見、改善点を考えることができない。6「その他」でよいか。

<木曾委員>

見直しの上縮小、見直しの上継続というのにも含まれた6、その他と理解すればよいのか。その上で、事業ごとに意見を付けるということによいか。

<山本委員長>

木曾委員が言われたように、6にさせていただいて、それぞれの経費について意見を付していくという形によいか。

— 全員了 —

<山本委員長>

では評価は6「その他」にさせていただく。そして、その評価に対する意見、改善点ということで、まず、生涯学習賞経費についてお願いする。

<木曾委員>

委員会論点にもあったように、生涯学習賞は亀岡に特化した人を表彰すべきではないかという意見を付していただければと思う。それが皆さんの意見であっ

たと思う。

<三上委員>

それも一つのアプローチだと思う。市民に特化した場合、賞、賞金をもらうということが、市民にどのような効果があるのか。市民福祉の増進、生涯学習意識の高揚につながるのかということ、しっかりと検証しなければならないと思う。受賞者が市外ばかりになっている中で、この賞が市民の生涯学習分野でどの程度の効果があるのかということは検証してほしい。その上で、市民を対象にするのか、やめてしまって、ほかの形にするか。寄附をいただいた方や、上田先生の遺志も尊重して、生涯学習でしっかりと市民のためにお金を使っていくという方向に切り替えることもできると思うので、そのような意見の付け方のほうがよいのではないかと。市民に特化して、この賞を続けるということでもないと思う。

<木曾委員>

そのことは、生涯学習審議会委員の方が、最終的にどうするかを決定されるので、我々が決めるのではない。議会としては、生涯学習賞は亀岡に特化した人を表彰することが一番望ましいのではないかと意見を付すということであって、それ以上、口出しすることはないと思う。審議会で決定され、予算に上がってきた段階でなければ我々は言えないと思う。

<三上委員>

私の意見であるが、そもそも市民を表彰するというのも含めて、このご時世で本当に必要なのかという思いで必要性を1にした。だから、市民に特化して続けてほしいとは思っていない。違うやり方で市民を励ましてほしいし、多くの市民が頑張っている自分たちのやりたいことを生涯学び続けていこうと思うようなことに切り替えてもらったほうがよいという意見である。皆さんの意見と違うのであれば、調整しなければならないと思っている。

<石野委員>

これまで著名な人を表彰してきたが、亀岡に特化した人を表彰することになると、議会が人選するわけではないので、審議会がどのような人を表彰されるのか、少し不安に思う。

<山本委員長>

亀岡市民対象に選定するというのは、少し難しいのではないかと。特化するのはいかがかと。

<石野委員>

しっかり人選されると思うが、亀岡という狭い中での人選になるので、偏りが出てくるのではないかと。三上委員が言われるような形で、少し時間を空けて考えていただければと思う。

<浅田委員>

これまで、亀岡の方も受賞されているが、人選される選考委員の方が亀岡市民に向かっている目線がないように思う。亀岡市民だけを対象にするのであれば、ここまでの選考委員の方は要らないと思う。

<松山副委員長>

亀岡は、石田梅岩先生の生誕地である。上田正昭先生も非常に功績のある方である。生涯学習賞は、生涯学習都市亀岡を全国に広めるきっかけになっていたと思うが、今、コロナ禍ということもあるので、1回原点に戻るべきではない

か。20回目は原点に戻って、亀岡市民に生涯学習がどれだけ広まっているのか、どれぐらい市民生活の中に落とし込めているか、啓発する意味も含めて亀岡市民だけを対象にしてやっていくべきではないかと思っている。選考委員は大学教授などのすばらしい先生方であるが、もう一度見直していくべきだと思っている

<木村委員>

亀岡の人だけでは難しいということであれば、亀岡のために何かしてくれた人や亀岡にゆかりのある人を表彰し、市民が亀岡のためにしてくれたと納得すればよいのではないか。今年の実賞者はユネスコの関係者であったが、このような方は日本中におられると思う。せつかく亀岡の石田梅岩賞なので、亀岡にゆかりのある人ぐらいまで広げてもよいと思うので、興味の湧くような形にしてほしい。

<木曾委員>

過去の受賞者の一覧表を見れば分かるが、亀岡の人は全て奨励賞、共生賞で、それ以上の大賞やゆうあい賞はない。奨励賞、共生賞はたくさん取っておられるので、亀岡の人たちも選考対象になっている。ところが、2019年は、3人しか受賞されていない。そうすると、共生賞から下で選んでもらえば、上は要らないのではないか。ゆうあい賞の寄附の関係があと何回かあるので、それは選んでもらったとしても、見直しをしていくのも一つの方法だと思う。生涯学習大賞にどれだけの重みがあり、どれだけのものかと思っているのか分からないが、今までの受賞者一覧を見ると、亀岡に特化した部分ということになると思う。

<三上委員>

意見にあまり違いはないと感じた。私は、生涯学習賞はどこかでけりをつけて、例えば亀岡で文化的に活動した人への功労賞や、生涯学習まちづくり協働支援金のように、文化活動を支援するようなものに変えていくほうがよいと思う。より多くの市民を応援し、称えるようなお金の使い方に変えると、市民は絶対にそのほうが、外の誰かに大賞でお金をあげて、話を聞かせてもらって終わりというよりはよいと言われると思う。それは市民理解も得られると思うので、そのような方向に切り替えてほしいと思う。

<山本委員長>

市民を対象に実施していくべきであるということと、この賞が本当に市民福祉の増進につながっているのか、また効果があるのかということをしつかりと検証して、この賞を続けていくかどうかということを考えていただきたいということではどうか。

— 全員了 —

<山本委員長>

次に、俳句事業経費について、お願いする。

<三上委員>

廃止という厳しい意見もあり、市民のためになる事業になるように根本的に考え直すべきであるというような松山委員の意見も声として紹介して、130人でも、やる気があって応募された人にとっては、また来年も楽しみにされているかもしれない。だが、その程度であれば、仰々しくやらないでほしい。書き方が難しいが、根本的に見直すべきだというような結論でどうか。

<山本委員長>

根本的に見直すということであれば入れる必要はないと思うが、学校に負担をかけることなく、自由応募であればよいという意見もあった。市民を対象に事業を進めて、効果があるかどうか検証していくという意見もあった。それも含めてでよいか。

<三上委員>

廃止すべきという意見もあり、学校教育に負担をかける形ではなく、市民を対象にした事業となるよう根本的に見直すべきであるというような文言でどうか。

<浅田委員>

今年の募集はもう始まっているのではないか。

<木曾委員>

今年の募集は決まっているが、小学校や中学校に無理押ししたような形にはなっていない。一般的に募集してもらうのは構わない。それを駄目と言っているのではない。だが、今、コロナ禍で授業時間の確保が非常に厳しい。いろいろな学校行事が削減されている中で、この時間を取らなければならないということであれば、本末転倒になるが、それは大丈夫なのか。

<市民力推進課長>

募集は始めている。小・中学校には、例年どおり、応募用紙の配布をお願いしている。授業の中でしてもらうような依頼は、これまでからしていない。子どもたちが家に持って帰って、自分で書いて自由に応募するような扱いにさせてもらっている。10月28日締切りで、取組はもう始まっている。

<木曾委員>

確認であるが、学校には強制していないということによいか。学校にも確認するがよいか。

<市民力推進課長>

応募用紙の配布をお願いした。投句箱を用意し、学校に置いてもらって、この箱の中に自由にに入れてもらってもよいし、切手を貼って返してもらってもよい。もしも学校で集まった場合は、市職員が取りに行かせていただくことにしている。

<木曾委員>

校舎長会で、強制ではなく、あくまでも自由に応募してもらえばよいということを通してもらえばよいのではないか。委員長から教育委員会に言っていたら徹底できると思う。

<市民力推進課長>

校舎長会でその説明はさせていただいた。投句箱を置かせてもらうことと、配布をお願いした。

<山本委員長>

廃止という厳しい意見もあり、学校教育に負担をかけることなく、市民を対象に事業を進め、根本的に考えるようにということによいか。次に、ガレリアかめおか指定管理について願います。

<木曾委員>

今後の大幅な施設の長寿命化については、もう少し真剣にやるべきだと思う。生涯学習かめおか財団への委託は、将来的にどうするかを根本的に見直す必要

がある。この2点を出して、事業を継続しながら、しっかりと見直ししてもらいたい。指定管理については、生涯学習かめおか財団だけに任すのではなく、民間も含めて検討することが、今後、ギャラリーかめおかを継続して運営していくことにつながるのではないか。公共施設の管理に関しても、非常に重要な問題になってくると思う。

<三上委員>

私は、ギャラリーかめおか単体で考えずに、他の文化施設等の計画等ともしっかり関連性を持たせて考えてほしいと思っているが、皆さんの意見を聞きたい。

<木村委員>

私もそう思う。亀岡会館がなくなった状況の中での大規模改修というのであれば、もう少し考えていただきたい。補助金は出ないのか。

<市民力推進課長>

今、改修の補助金を調べているところであるが、基本的には起債をさせていただくことになると思う。

<木村委員>

亀岡会館の代わりのもを直してつくるということなので、補助金がないか調べていただきたいと思う。

<木曾委員>

気持ちはよく分かるが、経費の評価であるので難しいのではないかとと思う。文化振興の予算も関わってくるので、生涯学習推進経費のギャラリーかめおかの運営という視点で考えなければならないのではないか。生涯学習かめおか財団は充実させなければならない。ギャラリーかめおかは、長寿命化も含めて完全にやっってしまうと、8億円ぐらいではとても雨漏りなどの改修は難しい。足場を建てるだけでも相当な経費がかかると思う。中予半端なことではなく、もっと根本的に考えてやるべきだと思う。

<三上委員>

ギャラリーかめおかの管理運営をどうするかということと、あの施設を将来的にどうするのかということとは切り離すことはできない。文化会館を建てろとか、ホールを建てろという話をしているのではなく、そういうことも含めた総合的な公共施設のマネジメントとの関わりの中で、ギャラリーかめおかの今後をしっかりと検討しないと、ズルズルと同じことをやっていると駄目だということ言いたい。

<松山副委員長>

三上委員が言われることもよく分かる。ただ、公共施設再編整備計画のようところでギャラリーかめおかと指定されると、ほかの複合的なことも含めた施設を考えられるのか疑問に思う。あくまでも私の意見であるが、ギャラリーかめおかの今後の使い方も一度見直して、どのような形の中でもはめられるような形で議論し、その公共施設再編整備計画と併せてやっていく必要があると思う。だから、今のギャラリーかめおかの指定管理に関しては、やはり決算のことで指摘するしかないのではないかとと思う。これはこれだけでという考えである。

<木曾委員>

複合的なことを考えてやるということであるが、今、文化会館などの施設が建てられるかということ、非常に難しいのではないかとと思う。だから、当面の間、音響の問題にしても、その機能を持たせるような改修にしなければならないと



思う。コンベンションホールの音響をもう少しよくするとか、それができないのであれば、2階の大広間の音響をよくして、ミニコンサートができるようにする。それと一緒に、ガレリアかめおか全体の将来をどのようにするかを考えていかなければ難しいのではないか。今すぐに文化ホールを建てようとしても、200億円とか300億円かかるかも分からない。それは難しいので、それよりも今の現実にある建物の中で、ガレリアかめおかをどのように利用し、委託先も、生涯学習かめおか財団ではなく、民間でもやってもらえるような方向性に持っていくべきだと思う。

<山本委員長>

施設の大規模改修については、効果的に改修するということと、指定管理については、将来的には民間も含めて考えていくということとでよいか。

— 全員了 —

<山本委員長>

ここで部長から意見を願います。

<生涯学習部長>

貴重な意見をいただき感謝申し上げます。ガレリアかめおかは、これから修繕がかなり必要になってくる。8億円というのは、ここ5年間くらいでどうしてもやらなければならない分だけである。構造をさわるということになると、数十億円というお金が絶対にかかってくるので、今後の公共施設の在り方を含めた中で、いかに有効活用できる施設にしていくかを検討していく必要がある。今日いただいた意見を生かして改善を進めてまいりたいと思うので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

<山本委員長>

それでは、生涯学習推進経費については、本分科会の評価は6「その他」として、今出た意見を付したいと思うのでよろしく願います。10分間休憩する。

16:57

(休憩)

16:57~17:10

#### (4) 文化振興経費

文化国際課長 説明

17:36

#### 《質疑》

<木曾委員>

論点である市民への周知啓発はどこまで進んでいるのか。

<文化国際課長>

マルシェとコアイベントでのアンケート結果は出ているが、今、正確にお伝えすることはできない。ただ、結果というよりも、そういうことを目指し、知っていただくことがとても重要だと考えている。かめおか霧の芸術祭のホームページを見ていただいたことがあるかと思うが、実施事業の結果をレポート的に伝えている。また、事前周知ということで、ホームページ、フェイスブック、インスタグラム、LINE、市役所のフェイスブック、LINE、あらゆるメディアを使って周知を図っている。昨年度は、キラリ亀岡おしらせの掲載頻度

が少なかったが、今年度は毎月K I R I 2芸術大学を掲載するなど、できる限り周知に努めているところである。

<木曾委員>

これだけの経費をかけて、市民に周知できたのか。

<文化国際課長>

もちろん、まだ足りていないところがあると思うので、自治会、高校、文化資料館など、昨年度は一緒に取組ができなかった新たなところと取組をしている。一般的な情報発信で届かないところは、いろいろあると思うが、直接対話することで補完したいと思い、積極的に周知に努めているところである。

<木曾委員>

1万人ぐらいの人からアンケートをとり、事業周知することが大事だと思うが、イベント以外のときにしたことはあるのか。

<文化国際課長>

アンケートは、そのイベントのときしかしていない。

<木曾委員>

どれだけの市民がこの事業に関心を持っておられるかをリサーチしない限り、自己満足に陥ってしまう可能性がある。今のアンケート結果では、本来の啓発の趣旨とは内容が違うと思う。何をもって市民に周知できたのか。広報紙、ホームページで止まっているのか。

<文化国際課長>

おっしゃるとおり、そういったところがあると思うので、積極的に啓発していくということで、10月31日と11月1日に、K I R I マルシェの少し違う版をしようと思っている。K I R I マルシェは、1,500人ぐらいの参加があったK I R I カフェ周辺でのイベントであるが、今年度はコロナの関係があるので、逆にそれだけたくさんの方が一度に集まること自体がよくないということもある。今回は会いに行くマルシェということで、幾つかの直売所に出向いていく。その啓発のために、全戸配布でチラシを入れる予定をしている。

<木曾委員>

説明はよく分かったが、市民への周知啓発がどれだけ進んだのかという論点が、この事業のポイントであろう。それが周知できていない中で、前年度から取組をして、亀岡市民の半数が理解しているという実証はどこで測るのか。私が聞く範囲では、かめおか霧の芸術祭というのは何だ、何をしているのかという反応である。私の周りだけかも分からないが、周知がまだ行き渡っていない。去年もそのように言ったが、今年も同じように言わなければならないことが情けないと思っている。

<文化国際課長>

繰り返しになるが、昨年度と今年度の一番大きな違いは、前回はK I K I 2芸術大学を3講座、ワークショップも幾つかと数が限られていたが、そのような市民に芸術を味わっていただく講座を充実させることが一番市民周知につながると思い、コロナが落ち着いた6月から毎週末実施し、毎月キラリ亀岡おしらせに掲載している。キラリ亀岡おしらせを読んでおられる方は大変多いと思うので、内容は分からなくても、芸術家と触れ合える事業だという周知は、前よりは進んだのではないかと思っている。

<木曾委員>

より具体的に進んだという度合いはどれぐらいか。

<文化国際課長>

具体的には分からないが、言葉を聞いたことがあると思われる市民の割合は、多くなったのではないかと考えている。

<木曾委員>

かめおか霧の芸術祭という名前を聞いたことがある人はあるが、内容を知っている人は少ないと思う。それが実態だと思う。財源としてふるさと力向上寄附金繰入金が多いが、地域創造の助成金ももらっている。今年度の決算には、もっと大きな部分が出てくるので、いかに市民に理解されている事業になっているかということがポイントである。そこが明確にならない限り、毎月やっている、こういう事業もやっている、キラリ亀岡おしらせにも載せているということが、市民に知らせたということになるのかという話をしているのである。そのことが、大多数の人に分かっていただくと判断すればよいのか、どうなのか。私の周りでは理解している人は少ないので、具体的な指標がなければ分からないと思う。何を根拠に、市民理解が得られたということになっているのか。

<文化国際課長>

全体のアンケートは、コアイベント以降は取れていない。今度、KIRIマルシェでアンケートを取る予定をしている。そのときに、市民にそういった問いもする中で、それは実際には体験したり、見ていただかなければ理解していただけないと思うので、皆さんに分かっていただける工夫を重ね、努力していきたいと思っている。

<木曾委員>

私が繰り返しこの話をするのは、これからの第5次亀岡市総合計画の中で、かめおか霧の芸術祭は非常に大事な役割を持つと市長がおっしゃっているからである。そうなるのにはやはりそれなりの根拠があって、市民に広がりもでき、大きく理解もいただいて、さらに第5次亀岡市総合計画の中に入れていくということになっているのだと思うが、この決算の中で、広がったという認識でよいのか。

<文化国際課長>

個人的な意見で申し訳ないが、広がっていると思う。

<木曾委員>

広がっているという根拠はどこにあるのか。感覚的に言われても分からないので、具体的に言ってほしい。今後、亀岡市の柱の事業になるので、どれくらいの人に理解いただいているのかを聞いている。

<文化国際課長>

事業数が、昨年度と今年度では全く違っており、増えている。立証することはできないが、キラリ亀岡おしらせは、多くの方に見ていただいているという前提で広報しているので、そういった意味で、多くの方に見ていただいている。

<木曾委員>

キラリ亀岡おしらせで広く知っていただいたということで、事業を進めているということか。「知っている」には、「名前を聞いたことがある」と、「中身を知っている」の2つある。キラリ亀岡おしらせで見て知っているのは、名前を知っているということで、中身を理解したということではないと思う。中身

を理解していただかなければ、この事業は成功しないのではないか。検証できるものはあるのか。

<文化国際課長>

例えば先ほど、K I K I 2 芸術大学の回数が増えていると言ったが、増えているだけではなく、ほぼ毎回定員いっぱいになっている。それは、それだけ多くの方に関心を持っていただいている証拠だと思うし、K I R I C A F E にも遠方から来ていただいております、関心を持って来ていただいている方が多いと感じている。

<三上委員>

繰入金の一般社団法人地域創造について説明してほしい。

<文化国際課長>

一般社団法人地域創造は、いろいろな文化芸術に対して補助金を出している。いろいろな項目がある中で、創造プログラム一般分で申請している。それについては、最大2,000万円のうち1,000万円を補助するという、2分の1補助金になっている。一度認められれば、3カ年まで申請することができるが、単年度ごとに申請し、計画を出して、認めていただくことになる。令和元年度の決算については、1年目となる。

<三上委員>

総務省の肝いりで、地域の文化振興のために、知事会や市長会などが出資してできた団体のようなものである。令和元年度は500万円で1年目ということで、令和2年度も3年度も500万円ずつつくということか。

<文化国際課長>

最初は3カ年で申請を出すのが、1年度ごとに計画をもう一度新たに出すことになる。令和2年度は、1,500万円のうち750万円を地域創造から歳入として受けるということで当初予算を認めていただき、交付決定をいただいている。

<三上委員>

一般社団法人地域創造は、国の地域創生交付金などとは全く違うものであるが、当初予算の説明では、繰入金が1,700万円と言われていた。私の認識が足りなかった。今年もそれが750万円入っているということが分かった。

<文化国際課長>

当初予算説明のときは、計画上はコミットされているが、交付決定は4月になってからしか来ないので、ふるさと納税ほかという表現にさせていただいている。

<木村委員>

事業を見ると、参加者が少ない。5ページのようなイベントには300人ぐらい来られたり、150人来られたりしているが、9ページ、パートアンド、ロンドンから来られた15人とか、吉田さんのウッドスタディは6人である。委員会論点は市民への周知啓発であるが、参加募集はどのようにされているのか。

<文化国際課長>

大きなイベントは、昨年度もキラリ亀岡おしらせに載せたが、基本的にはかめおか霧の芸術祭のフェイスブックやインスタグラムで募集した。大体、K I R I C A F E を拠点として開催しており、30名も入ると狭いような場所であるので、定員は最大30名ぐらいを考えていた。また、吉田さんの事業は、対

- 話し、教えてもらいながら作るということで、募集自体が6名ぐらいであった。
- <木村委員>  
材料代などの負担なしでされているのか。
- <文化国際課長>  
もちろん実費を負担いただいている。その回ごとに違う参加費で募集している。
- <木村委員>  
亀岡市全体の事業として、もう少し参加人数が多いイベントをすべきではないか。参加者が少ないので、偏った方が参加されているように感じる。6人の参加者であれば、事業としてどうなのかと思う。
- <文化国際課長>  
これは昨年度のことであるが、今年度は密にならないよう配慮しており、そういった意味で、人数制限をするような形で進めている。
- <木村委員>  
亀岡市全体の事業として、参加者が少ないのはどうかと思う。
- <松山副委員長>  
委員会論点に上がっているが、啓発はどれぐらい進んでいるのか。
- <文化国際課長>  
周知と啓発の違いは、どのように捉えればよいか。
- <松山副委員長>  
周知は、何も知らない人に対して、かめおか霧の芸術祭があるということを一定周知するということである。啓発は、何も分からない人に教え、導いていくことだと思う。それも広辞苑にも書いてあるが、周知と啓発は一緒にされがちであるが、周知という部分で終わってれば、ただ、かめおか霧の芸術祭ということで終わっていると思う。かめおか霧の芸術祭とは何をしているのかという啓発の部分で、何も分からない人にこういうことをしているという啓発がどれぐらいできているのか。アンケートもなかなか取れていないと思うが、来られた方の意見はいろいろと出ているのではないか。
- <文化国際課長>  
そういった意味の啓発は、非常に大切だと思っている。このようなイベントがあるというだけでは分からないので、かめおか霧の芸術祭のホームページに、例えば吉田さんの木工であれば吉田さんの作品や吉田さんの経歴、前回のワークショップの様子を載せて、見た人に体験したいと思ってもらえるような啓発を行っている。
- <松山副委員長>  
それは今年度の話だが、イベントに来られた方にホームページにアクセスしてもらえるような啓発を、周知も含めてしているという認識でよいか。
- <文化国際課長>  
ホームページを見ていただく仕組みとして、申し込み方法を、ホームページから一覧などをいろいろと見ていただいて申し込めるということにしているので、理解が進んでいると思う。
- <松山副委員長>  
SNSを使えない方へのアプローチは、どのようにしているのか。
- <文化国際課長>  
当課の電話番号やファックス番号を掲載しているので、実際に電話で問合せも

ある。そういうときには、なるべく親切に対応するよう心がけている。  
(質疑終了)

18:05

## 《評価》

＜山本委員長＞

個人採点を順次報告願う。

- ・松山副委員長  
必要性：2点、妥当性：2点、効率性：1点、成果：2点
- ・三上委員  
必要性：2点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点
- ・浅田委員  
必要性：2点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点
- ・木村委員  
必要性：2点、妥当性：2点、効率性：2点、成果：2点
- ・木曾委員  
必要性：2点、妥当性：1点、効率性：1点、成果：2点
- ・石野委員  
必要性：3点、妥当性：3点、効率性：2点、成果：2点

18:09

## 《総合評価結果のまとめ》

＜山本委員長＞

集計結果は、100点換算で39.1点である。評価基準が2「課題がある」となった。この評価点数、評価基準を踏まえて、総合評価結果について協議を行いたい。意見をお願いします。

＜木曾委員＞

総合評価は、中止とまではいかないが、見直しの上縮小するべきだと考えるので4である。できれば6がよいが、それも見直しの上ということである。理由は、まだ市民全体に浸透していない事業であるにもかかわらず、国の予算がついたからやっている。それぞれの芸術家は、一懸命頑張って事業をされている。それは評価しているので、全面的に中止や廃止ということにはならないと思うが、今の状態では、かめおか霧の芸術祭という名前は分かっているが中身は分からないというのが現実であると思う。そういう意味から、「見直しの上縮小」と総合評価したい。

＜木村委員＞

3の「見直しの上継続」である。これ以上拡大されても困るが、ただ、芸術家が一生懸命にやっておられるのは分かる。市民周知、啓発ができていない。小さなことばかりされているので、市民に分かるようなイベントをしてほしいと思う。

＜三上委員＞

4の「見直しの上縮小」である。地域では、芸術をつなぎにいろいろな活動が出てきて面白くなってきたという感覚は持っておられると思う。芸術家に光が当たり、それぞれが生き生きと面白い取組をされている。初年度の指摘要望では、市民には分かりにくいということ、お金をどんどんつぎ込むものではない

だろうということであった。一定のコアな人たち、芸術家、そこに携わる人たちが、地域で面白いことをするのはよいことではあるが、市民に説明できるようにすべきだということと、どんどん広がっていくのは心配だという指摘を1年目に出した。今年は、実行委員会の中に、これで金もうけをしようという人が出てきたり、仲山副市長の講演で、いかにもうけるかというような話になってきた。やおやおや、FLY BAGなど、他の所管の事業が増えてきて、SDGsも入ってきた。かめおか霧の芸術祭により、輝く人が出てきたり、地域が楽しくなっていき、しかも一般財源を使わずにやっているのだから、あまりとやかく言うことではないのだが、いつの間にかリーディング事業だ、これが中心だ、SDGsも絡めてこれでもうけようという、いろいろな所管に話が及んでいくということにはならないほうがよいと思っている。そういう意味での「見直しの上縮小」である。

<石野委員>

「見直しの上縮小」である。まだ始まったばかりで、3年間は地域創造助成金がおおりると言われている。一般財源は入っていないが、将来的にどんどん広がっていき、このような助成金がおおりてこなくなるときの、やはり市としてそれだけのお金を出さなければならなくなると思う。そういう意味で、「見直しの上縮小」である。それと、まだまだ認知度が低いという思いもある。

<浅田委員>

周知啓発がまだまだ進んでいないと感じている。もう一度、周知啓発について考えて、そこに力を入れていただきたいと思うので、「見直しの上継続」である。また、若い方が素直に、真剣に捉えて携わっておられる姿を見ると、ぜひ、もっと周知啓発に力を入れていただきたいと思う。

<松山副委員長>

4の「見直しの上縮小」である。市が若い芸術家を応援していることは、とてもよいことだと思っている。それを否定しているわけではない。ただ、これから市と一緒にやっていくことではないと思っている。新たに芸術家が輝けるような場所を、しっかりと整備できている段階にあると思っているので、これからは芸術家を応援するためにも、一定、距離を取ってやっていく必要があると思っている。そこから、周知啓発に関しては芸術家がされることであり、市は全面的にバックアップしていけばよいのではないか。芸術家が一人立ちし、もしくはこれから芸術家を発掘するためにも、市はこの事業から手を引く必要があるのではないかと思う。

<山本委員長>

「見直しの上継続」が2人、「見直しの上縮小」が4人である。それぞれ意見をいただいたが、「見直しの上継続」の方から、意見があればお願いしたい。

<木村委員>

市民が芸術家と触れ合うのは、趣味の世界のようなものだと思う。もっと周知されているのであればよいが、芸術家にはいずれは独立してもらわなければならない。そのための足がかりとされるのはよいと思っている。

<山本委員長>

継続と言われたが、中身としては「見直しの上縮小」で、芸術家を応援することはよいが、一人立ちしていただきたいという意味も込めてということではよいか。浅田委員は、継続と言われたがどうか。

<浅田委員>

私も、若手芸術家は一人立ちし、自分で計画を立ててやっていっていただきたい。そこまでは周知啓発していかなければ、やはり芸術家だけでは無理なところもあるのではないか。まだ動き出したところなので、いずれは引くというタイミングも必要だと思う。そういう意味では縮小である。芸術家には頑張っていたきたいと思っている。

<山本委員長>

また意見のところで付していただきたい。では、「見直しの上縮小」と評価させていただいてよいか。

— 全員了 —

<山本委員長>

総合評価は、4「見直しの上縮小」とさせていただく。その上で、総合評価に対する意見、改善点があれば願います。

<木曾委員>

啓発をしっかりしていただくということが、一番大事だと思う。

<三上委員>

周知啓発よりも、市民に対する説明責任をしっかりと果たしてほしい。自分の普段の生活や暮らしが芸術と関わっているということを知り、それを面白いと思う人は、どんどん知ってもらえばよいが、市民全員にこのようなことをやっている周知する必要はないと思っている。むしろ逆で、このようなことを市がやることを、市民が納得できるように示してほしい。例えば、ハーフマラソンは、スポーツが嫌いな人の中には、なぜハーフマラソンにお金を使うのかという人がいたとしても、あれだけ多くの人に参加し、よいコースだ、よかった、また走りに来たいと言っている。それは説明責任を果たしていると思う。同じことで、芸術には興味がないという人がいても、楽しんでいる人がいて、市内に活気が出て、農家の人も関わって面白いなという程度でよいと思う。だから、周知啓発をやれというのはちょっと違う。むしろ、説明責任を果たすだけのことをやりなさいということと、もう一つは、市のいろいろな事業がこれにどんどん関わっていかなければならないというのは違うと思う。今、実行委員の皆さんがやりたいと思っていることをうまく結び、発信していくことはよいが、庁舎も変えていこうという話になっている。果たしてそれは市民理解が得られるのか。市の事業を何でも巻き込んでいくというのは違うと思うので、そうならないようにしてほしい。行政は、実行委員会に業務委託して頑張ってもらっているので、バックアップし、いろいろな意味で発信や応援はするけれども、お金はどんどん引いていく。そういう意味での「見直しの上縮小」である。そういう方向にあってほしいと意見をつけたい。

<木曾委員>

今、三上委員が言われたように、市がなぜこの事業に関わっているのかということやきちっと説明することは、もちろん当たり前のことである。この事業をいつまでやっていくのかということも含めて、説明責任を果たしていかなければならない。妥当性、市が行うべき事業かを1にしたが、本当はゼロである。必要ないと思っている。本当は、民間を支援する形のほうがよいので、そういう意味で関与するということも含めての啓発であるということも補足しておく。



<浅田委員>

周知啓発は必要であるが、横文字が多く分かりにくいところは、年代によってはある。言葉が多くなるかもしれないが、括弧をつけて説明書きをしていただければ、もう少し簡単に捉えられる方が増えるのではないかと感じている。

<山本委員長>

今までの意見を聞いて、部長から願います。

<生涯学習部長>

長時間、貴重な意見をいただき感謝申し上げます。かめおか霧の芸術祭も、いろいろな課題が浮き彫りになってきたと思う。そういった中で、皆さまから意見をいただきながら、市民に愛され、理解される事業をすることに全力を尽くしたいと思うので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

<山本委員長>

それでは、文化振興経費、かめおか霧の芸術祭にかかる経費については、本分科会の評価は、4「見直しの上縮小」とさせていただく。そして、附帯意見としては、市民への説明責任、啓発も含めてであるが、しっかりと果たしていくべきということ、そして、市のいろいろな事業に関わってきているのは少し違うのではないかとということで、そういう面も考えていただきたいということを付したいと思う。以上で終わる。理事者の皆さん、退席いただいて結構である。

18:29

(生涯学習部 退室)

(休憩)

18:30~18:45

## 4 討論～分科会採決

### 《委員間討議》

<山本委員長>

討論に先立ち、委員間討議を実施するかをお諮りしたい。討議のある場合は、論点を言っていただくようお願いする。まず、項目を決めていく。

<三上委員>

生涯学習部の文化センター運営経費は、かなりお粗末で、これでは認定できないと思った。コロナで中止というのが、なぜそんなに起こるのかということで、木曾委員から事業計画と実績報告の提出を求める声上がり、それが出された。やはり、補助金ありきで、人権啓発や人権学習会といった、普通は8月の京都市府人権月間や11月の人権週間とタイアップして実施される事業が、計画では未定で、報告では3月にやろうとしたがコロナでできなかつたと書かれていた。

<木曾委員>

たくさんあるが、セーフコミュニティの認証については、継続しないような形の中でやるということで、今ある事業はしっかりやってもらって、事業を完徹するということである。これを一つ上げたいと思っている。

2番目に、移住・定住促進経費については、移住促進事業と言いながら、観光とリンクしている部分が非常に分かりにくいので、ここを整理すべきだと思っている。

3番目、かめおか霧の芸術祭については、附帯決議もつけたが、これ以上予算

を増やさないう、縮小していく形の中で、徐々に芸術家に移管していったほうがいいと思っている。

生涯学習推進経費、特に俳句大賞については、地元の特化した俳句大賞としてはどうかと思っているし、それと併せて、生涯学習賞についても検討が必要になってくる。以上、4項目である。

<浅田委員>

財産区の管理について、市が書面だけの管理だけで今後よいのか。自然災害が発生する確率が高くなっている今の環境で、手がかけてられているところ、かけられていないところが、はっきりと出ていると感じている。今すぐできることではないかもしれないが、今後の課題として上げさせていただく。

<三上委員>

市長公室の総務事務経費には、いろいろなものが入っている。1つは、中東和平プロジェクト現地プログラムの参加であるが、本当に通訳で副市長が行く必要があったのか。それから、レリーフのことは木曾委員も怒っておられたし、光秀像のことも含めて、市民に対して納得のいく説明ができるのか疑問に思うので、論議いただけたらと思う。

<山本委員長>

7項目上げていただいたが、全部したほうがよいか。少し多いので、選定すればどうか。

<木曾委員>

去年は、事務事業評価の項目はこの中には入れていない。

<山本委員長>

それでは、生涯学習部の文化センター運営経費、そして財産区の管理、市長公室の総務事業経費の3点について自由討議させていただきたいと思う。まず、文化センター運営経費について、事業計画がルーズで、後半に重なり、コロナでできない事業も多かったと聞かせていただいたが、意見を願います。

<木曾委員>

今、三上委員が言われたとおり、計画も立てずにでたらめなことをやっていることが初めて分かった。これは論外だと思うので、厳しく指摘しなければならないと思う。事業計画がないのに予算要求してきたということは、全く本末転倒であると思うので、厳しく言いたいと思っている。

<三上委員>

事業計画の中に、人権福祉センターの隣保館の活動は、デイサービス事業、地域交流促進事業、相談活動の3つがある。相談活動は、市単費と書いてあったので、ここを出てこない。事業報告の一番下であるが、回数も、やったかどうか、何人来たかも書いてなかったので、それを説明してもらうために担当課へ聞きに行った。そうすると、それは確かに市単費で、2人に年間20万円を渡していると言う。実績はどうかと聞くと、はっきり言って1人もない、何の相談もないが、いつでも相談できるように詰めてもらっているということで、毎年毎年20万円がその2人に支払われていると言う。このようなお金の使い方がされているということに驚いた。資料を出してもらわなければ分からなかったことである。コロナで中止したことも分からなかった。やはり、本当にしっかりと掘り下げて見ていかないと、結局、曖昧に、既得権のような、過去の歴史的経緯もあるというようなところで済まされている。これは、しっか

りとメスを入れなければならないと思う。

<山本委員長>

ほかになれば、次に財産区の管理について願います。

<浅田委員>

財産区は、市が所管で管理しているのは、書面上だけのことであるが、今後、災害、豪雨などいろいろなことへの対策を考えて管理していかなければならないと思う。できるだけ早く対応しておかないと、とんでもないことになる可能性が出てきていると感じている。

<木曾委員>

今、やっていることで事足りなくなってきた。今後、財産区の山だけでなく亀岡市の山全体であるが、どうするのかという方向を示していかなければ、本当に大きな災害が起こると思う。そのような観点から指摘したほうがよいと思う。

<浅田委員>

市としては、財産区の管理を完全に地元に移したいと考えていると聞いたが、最終的にはそうしたいと思っているのか。

<木曾委員>

基本的にそれはできない。反対に、地元が管理している山を市が受けなければならないという状況はあるかもしれないが、財産区を誰に戻すのか。地元に戻すということは、個人の所有になる。森林組合をつくるということであればできるが、そうでなければ名義は個人になる。今、組合で持っているのは、篠町野条、曾我部町寺ぐらいしかない。それ以外は、個人の所有になっており、役員が持ち回りでやっている。組合をつくと、税金の問題などが出てくるので大変である。

<山本委員長>

ほかになれば、次に、市長公室の総務事業経費について願います。

<三上委員>

副市長がイスラエルへ行く必要があったのか、旅費について疑問に思っている。名誉市民レリーフ像については、予算のときから我々が実態に即して効率的な形で提案していたが、そのようには受け止められず、また二転三転した。それから、明智光秀像建立事業補助金についても、市民理解が得られるものかどうかは分からない。市民からよいものをつくってくれてよかったという声があるのであればよいが、ここで使われている経費が、本当にこの暮らしが冷え込んでいると大変な中、必要だったのかということは疑問に思っている。皆さんの意見を聞きたい。

<木曾委員>

中東和平プロジェクトのことは、もちろんおかしいとは私も思っているが、真実はどこにあるのかが分からない。そしてまた急に、アメリカとブラジルに副市長と行かれた。それも、真意がよく分からない。このようなことがまかり通ること自体、非常に不審に思う。国際交流の関係は、計画的にすすめていくべきだと思う。

## 《附帯決議》

<木曾委員>

附帯決議をつけたいと思うがいかがか。

<山本委員長>

附帯決議をつけるという意見が出たがよいか。

— 全員了 —

<木曾委員>

附帯決議については、まず、文化センターの運営管理に関して、非常に不透明な部分がたくさんあった。我々ももう少ししっかり審査の中でやっていくべきであったが、それが抜け落ちていて、非常に不透明な部分が見えてきた。これは厳しく指摘し、来年度にこのようなことがあれば、厳しく言うだけではなく、厳しい判断をしていかなければならないということを言いたい。それと、セーフコミュニティ、移住・定住、かめおか霧の芸術祭、生涯学習推進、俳句大賞の問題も含めて、事務事業評価の中で出た厳しい意見を抽出して附帯決議につけていただくことがよいのではないか。

<山本委員長>

附帯決議について、文化センター運営経費については、予算を立てている以上はしっかりと事業計画も立てて実施するようということによいか。事務事業評価で上がった内容については、具体的にどうするか。

<木曾委員>

まず一つ目のセーフコミュニティについては、再々認証までしてきて、一定、周知されてきたところはある。これ以上、認証手続は行わず、市民に周知を図っていただきたいということが一点。

移住・定住促進経費については、観光と移住・定住の境目が分からないので、それを明確にして、今後、対策を取っていただきたい。指定管理の関係もあるのでということがもう一点。

かめおか霧の芸術祭については、規模を縮小し、これ以上一般財源も含めて財源を投入しないような形でしていくこと。要するに芸術家の皆さんに移行していくという内容。

文化センター運営経費については、今言ったとおりである。

生涯学習賞については、亀岡市民に限定にし、賞の在り方を根本的に見直すこと。それと、俳句大賞については、これも亀岡市民を中心に募集していくこと。こういう内容を附帯決議にしていきたい。

<山本委員長>

事務事業評価結果の附帯意見に上げた内容を、附帯決議として上げていくということであるが、それでよいか。

<三上委員>

かめおか霧の芸術祭については、今年度の決算のことよりも、この補正予算も含めた、どんどん広がって、庁舎の地下の食堂まで改修してということが、今、ここで論議することではないかもしれないが、そこがとても気になる。この決算で附帯決議をつけることも一つであるし、補正予算の審査があるので何とも言えないところである。

<山本委員長>

ここで附帯決議として上げることも一つであるが、補正予算のほうで上げていくこともできる。ここで上げるか、上げないかを諮りたい。意見をお願いする。

<木曾委員>

かめおか霧の芸術祭については、決算で指摘要望をつけておくことがけじめだ  
と思う。その上に立って、今年度のこの補正予算で出ている内容に広がってし  
まっている。令和元年度の予算と分けて考えて、補正予算のときに厳しい意見  
を交わせばよいと思う。

<石野委員>

今、言われたように、これはこれで、補正は補正で考えればよいと思う。

<三上委員>

かめおか霧の芸術祭は、去年の予算案で指摘要望し、今年予算案にも附帯決  
議をつけ、また決算で附帯決議をつける。この間の議会が下してきたことと兼  
ね合いもあるので、どのような文言にするかは考えなければいけない。

<山本委員長>

附帯決議も後で出てくる指摘要望も、委員会から全体会に上げる。そして、決  
算特別委員会として認められれば、附帯決議で上がることになるので確認を取  
らせていただけておく。事務事業評価の評価結果の中で、附帯意見として上げ  
た内容を附帯決議として上げてよいか。

<木曾委員>

当初はSDGsがまだなかったが、それが入ってきて、いろいろな事業が出て  
きた。それと令和元年度の分とは若干違うので、分けたいと思っている。

<山本委員長>

ほかになれば、決算は決算ということで、附帯決議で上げさせていただくと  
いう方向でよいか。

<三上委員>

反対する立場なので結構である。

<山本委員長>

では、今の内容で附帯決議を進めさせていただく。暫時休憩する。

19:22

(休憩)

19:22～19:50

## 《討論》

<三上委員>

一般会計決算認定について、不認定をさせていただく。市民福祉の増進のため  
に、大半は使われていると思う。しかし、再三指摘をしても、結局、認定して  
しまうことで直っていない。人権福祉センターのこと、かめおか霧の芸術祭の  
こと、それから、生涯学習賞はずっと言ってきた。やはりしっかりと判断  
を下さなければ、なかなか市当局も変わってくれない、本気になってくれな  
いと思う。詳しくは、全体場で述べたいと思う。

<木曾委員>

私は、認定の立場で討論をしたい。非常に不可解な点もたくさんあるが、我々  
が見落としたことや、追求できなかったこともあるので、これは指摘要望で明  
確につけていく必要があると思う。それぞれの事務事業評価についても、厳し  
い指摘はしたが、中止や廃止ということはなかったので、いろいろな思いはあ  
るが認定するというので、詳しくは全体場で討論したいと思う。

<石野委員>

当年度の歳入も、3年連続で100億円を超えたということで、よい形になっている。事業については、指摘要望をつけることとして、令和2年度決算に対しては、おおむね予算に沿った事業は展開されたという思いであり、おおむね良として、賛成の討論とさせていただく。

(討論終了)

## 《採決》

＜山本委員長＞

賛成者は挙手を願う。

第6号議案（一般会計決算認定）	挙手多数 認定 （反対：三上委員）
第12号議案（曾我部山林会計決算認定）	挙手全員 認定
第16号議案～45号議案（各財産区会計決算認定）	挙手全員 認定
令和元年度一般会計決算認定に対する附帯決議（案）	挙手全員 可決

## 5 指摘要望事項

＜浅田委員＞

財産区の管理について、指摘要望でお願いします。

＜松山副委員長＞

交流会館の入り口の土地の一部をいまだに神前財産区から借りているので、早急にその事案を解消し、整理してもらいたいということを入れていただきたい。

＜木曾委員＞

中東和平プロジェクトと名誉市民レリーフの支出については、もう少し厳格にされたいという内容を入れていただきたい。

＜山本委員長＞

財産区の管理についてということと、神前財産区で社会体育施設等土地賃借料経費、中東和平プロジェクト現地プログラム等への参加と名誉市民肖像について、事業内容、支出については厳格に行っていただきたいということで、決算全体会における総務文教分科会委員長報告及び事務事業評価結果まとめについては、これまでの審査内容を踏まえ、調整をさせていただく。文言については正副委員長に一任願いたい。

＜事務局次長＞

財産区の指摘要望の内容について、もう一度お願いしたい。

＜木曾委員＞

出納事務のみではなく、財産区の管理に関して、市も積極的に関与することという指摘である。

## 6 その他

＜山本委員長＞

それでは、本日はこれまでとする。

明日は午前10時から再開し、委員長報告等の確認を行う。

20 : 10